HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『伊勢物語』本文の研究
Author(s)	松本, 裕喜
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12075号
Issue Date	2016-03-24
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k12075
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61592
Type	doctoral thesis
File Information	Yuki_Matsumoto.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成二十七年度　博士論文

『伊勢物語』本文の研究

文学研究科　言語文学専攻

指導教員　後藤　康文

学生番号　〇五一二五〇三三一

氏　名　松本　裕喜

目次

○凡例……3
○緒言……5
○第一章　定家本『伊勢物語』を疑う……10
・第一節　六十三段「あひえてしかな」考……11
・第二節　四十四段段末本文考……23
○第二章　広本系諸本の本文……35
・第一節　大島本と阿波国文庫本……36
・第二節　大島本と日大為相本・泉州本……45
○第三節　『伊勢物語』と物語……54
・第一節　二条后物語の成長……55
・第二節　紀有常歌の本文変成……69
○結語……80

凡例

①『伊勢物語』は、それぞれ以下の文献に拠ったが、適宜私に句読を切り、清濁を分かつものとする。なお、他作品の本文に関しては、必要に応じて依拠した本文を明示するが、影印に拠った場合は、『伊勢物語』と同様の処理を施す。和歌の引用は、原則『新編 国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』(角川学芸出版、二〇〇三年)に拠るが、これに拠らない場合は特に注に示す。

〈非定家本〉

○大島本……『国立歴史民俗博物館蔵　貴重典籍叢書　文学篇　第十六巻』(臨川書店、一九九九年)

○日大為相本……田中宗作・杉谷寿郎「日本大学総合図書館蔵伝為相筆本『伊勢物語』翻刻と研究」(「語文(日本大学)」六十一号、一九八五年二月)

○阿波国文庫本……片桐洋一編『異本対照伊勢物語』(和泉書院、一九八一年)

○谷森本……鈴木知太郎解説『伊勢物語　天福本・谷森本』(古典文庫、一九五二年)

○泉州本……『泉州本伊勢物語』(国学院大学学術部、一九四一年)

○本間美術館蔵本…『伊勢物語　伝民部卿局筆本』(ほるぷ出版、一九七六年)

○真名本

・寛永版本……高橋忠彦・高橋久子編『真名本伊勢物語―本文と索引―』(新典社、二〇〇〇年)

・旧本伊勢物語…木村晟・瀬尾邦雄・柳田忠則『真名本　伊勢物語　綾足校訂』(翰林書房、一九九五年)

○武者小路本……大津有一編『伊勢物語に就きての研究　補遺篇　索引篇　圖録篇』(有精堂出版、一九六〇年)

○藤房本……吉田幸一編『伊勢物語　伝藤原藤房筆本』(古典文庫、一九九八年)

○『参考伊勢物語』所引為家本

…『参考　伊勢物語』(岩波書店、一九二八年)

〈定家本〉

○学習院大学蔵本…鈴木知太郎校注『天福本伊勢物語』(武蔵野書院、一九六三年)

○建仁二年本……『冷泉家時雨亭叢書41』(朝日新聞社、一九九八年)

○九大本……『伊勢物語〈九州大学蔵本〉』(古典文庫、一九六七年)

※なお、これら以外の諸本については、池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究　校異編』および山田清市『伊勢物語校本と研究』の校異として挙げられた本文に拠る。

②『伊勢物語』の諸注とその略称は、以下の通りである。

・池田亀鑑『伊勢物語精講』(學燈社、一九五五年)……池田『精講』

・大津有一・築島裕『日本古典文学大系　伊勢物語』(岩波書店、一九五七年)……大津・築島『大系』

・松尾聰・永井和子『校註　伊勢物語』(笠間書院、一九六八年)……松尾・永井『校註』

・上坂信男『伊勢物語評解』(有精堂出版、一九六八年)……上坂『評解』

・折口博士記念古代研究所編纂『折口信夫全集　ノート編　第十三巻』（中央公論社、一九七〇年）
……折口『ノート編』
・中田武司・狩野尾義衛『伊勢物語新解』（白帝社、一九七一年）……中田・狩野尾『新解』
・森野宗明『伊勢物語　現代語訳付』（講談社、一九七二年）……森野『文庫』
・森本茂『伊勢物語全釈』（大学堂書店、一九七三年）……森本『全釈』
・片桐洋一『鑑賞日本古典文学　伊勢物語』（角川書店、一九七五年）……片桐『鑑賞』
・渡辺実『新潮日本古典集成　伊勢物語』（新潮社、一九七六年）……渡辺『集成』
・石田穣二『新版　伊勢物語』（角川書店、一九七九年）……石田『文庫』
・中野幸一・春田裕之『伊勢物語全釈』（武蔵野書院、一九八三年）……中野・春田『全釈』
・竹岡正夫『伊勢物語全評釈』（右文書院、一九八七年）……竹岡『全評釈』
・福井貞助『新編日本古典文学全集　伊勢物語』（小学館、一九九四年）……福井『新全集』
・秋山虔『新日本古典文学大系　伊勢物語』（岩波書店、一九九七年）……秋山『新大系』
・石田穣二『伊勢物語注釈稿』（竹林舎、二〇〇四年）……石田『注釈稿』
・鈴木日出男『伊勢物語評解』（筑摩書房、二〇一三年）……鈴木『評解』
・片桐洋一『伊勢物語全読解』（和泉書院、二〇一三年）……片桐『全読解』

緒言

一、『伊勢物語』の伝本とその研究史

『伊勢物語』は、我が国の古典文学の中でも最も多くの読者を持ち、親しまれてきた作品であると言えよう。現存する写本・版本の数も夥しいが、これまでの研究においては、定家書写の系統の伝本、とりわけ学習院大学が蔵する天福二年書写の奥書を有する本が重要視されて来た。本論文は、こうした定家本一辺倒とも言ってよい現今の『伊勢物語』研究を打破すべく、広本（諸本系統の定義は後述する）系の伝本を中心にその本文を検討するものである。

現存する『伊勢物語』の伝本は、「藤原定家書写の系統の本であるか」「章段数が百二十五段よりも多いか少ないか」など様々な基準によって分類され、系統立てられている。諸家により相違はあるものの、おおむね、以下のように分類されている。

①百二十五段本

a定家本（百二十五段本のうち、藤原定家が書写した系統）

…藤原定家が書写した本は、本文・奥書によって、〈天福本・武田本・流布本〉のいずれかに分類される。先に述べたように、これらのうち特に現在の通行本的地位を占めているのが、学習院大学蔵本を中心とする天福本である。また、流布本は山田清市によって根源本という名称（奥書が「抑伊勢物語根源…」で始まることによる）が与えられ、さらに細分化されている。また、前記の他に、建仁二年本など、書写年代の明らかなものも少ないながら存在する。

b古本（百二十五段本のうち、右に含まれないもの）

…百二十五段本のうち、定家書写の奥書が存せず、aに分類されないもの。ただしこれらの中には初期の定家本が含まれている可能性を池田亀鑑は示唆している。

③広本

…百二十五よりも章段数の多い諸本。この系統の分類に関しては、本論文第二章で詳述する。

④略本

…百二十五よりも章段数の少ない諸本。現存略本は全て百十五段を持つ同系統のものである。本間美術館本をもって代表される。一般に塗籠本と呼ばれるが、これは誤りである。というのも、たとえば建仁二年本『伊勢物語』の奥書などに、

高二位成忠卿本【始起春日野若紫哥／終迄于昨日今日云々】朱雀院塗籠本是也

業平朝臣自筆本【始起名のみ立歌／終迄于昨日今日云々】自本是也

小式部内侍本　【始起君やこし歌／終迄于程雲居哥】小本是也

とある如く、正しくは現存初冠本全てを指して「朱雀院塗籠本」というのが正しく、本間美術館本などを指して「塗籠本」というのは不正確だからである。

⑤真名本

…真名で書かれている本。百二十五段本に比して若干章段に出入りがあるが、その数を合計すると百二十五段となる。

この他にも、いずれにも分類することの難しい別本（真名本にも一部通ずる特異な用字で書かれた武者小路本と、多くの書入・校合の痕跡の見られる藤房本。いずれも零本である）や、他本の奥書などに

のみその名が見える散佚本（六十九段を冒頭に据えるという小式部内侍本や、広本系諸本の一部にその名が見える皇太后宮越後本など）もある。

はじめに述べたとおり、これまでの研究では、多くの注釈書や論文が、学習院大学蔵本をベースに『伊勢物語』を論じていた。しかし、『伊勢物語』の、特に注釈的研究においては、定家本のみに拠る限り正しい読解の望めない箇所も多々存在すると考えられ、他本の本文にも正面から向き合っていくことが必要であると考えられる。次に示すのは、その一例である。

二、定家本のみで『伊勢物語』は読めない

試みに、『伊勢物語』の二十七段を学習院大学蔵本で読んでみたい。この段も勿論、従来学習院大学蔵本で読まれ続けてきた。

むかし、おとこ、女のもとに、ひと夜いきて又もいかずなりにければ、女の、手あらふ所に、ぬきすをうちやりて、たらひのかげに見えけるを、みづから、

我許物思人は又もあらじとおもへば水のしたにも有けり

とよむを、こざりけるおとこたちぎゝて、

みなぐちに我や見ゆらんかはづさへ水のしたにてもろごゑになく

男が一夜限りで通って来なくなったことを嘆く女の「我ばかり…」の独詠をたまたま立ち聞きした男が「水口に…」の歌を詠む、という、ごく短い一段である[二]。従来の諸注は、一部[二]を除き、定家本で問題なく読解できるものとして考えているようである。この段の現代語訳を、現在広く流布しているテキストの一つである、福井『新全集』で掲出する。

昔、男が、女のところに一晩行って、二度とは行かなくなってしまったから、女は、手を洗う所で、盥の上にかける貫簀が取り除けてあって、自分の顔が盥の水に映って見えたので、ひとりで、

われればかり…（私ほど悲しい思いの人は、ほかにあるまいと思っていますと、この水の下にもいたのでしたよ）

と詠んで口ずさむのを、来なかった男が物陰で立ち聞いて詠む、

みなくちに…（水の下で泣く人とは、水口に私の姿があらわれたのでしょう。田の水口の蛙までもが、水底で声を合せて泣いているではありませんか。私もあなたと声を合わせて泣いているのですよ）

男が詠んだ和歌に現れている副助詞「さへ」の訳出が正確になされている点などはひとまず評価できようが、この和歌の「や…らむ」の係り結びを疑問の意味で訳出できていない点など、細かな所では誤りの多い訳である。それらは措くとしても、ここで問題としたいのは、傍線部の解釈である。さきに挙げた原文でも対応する部分に傍線を付したが、原文で二重線を引いた二つの格助詞に留意して正確に訳を作ると、「盥の姿に見えたのを」となるはずで、福井『新全集』の訳にはならない。「A」に映った「B」が（見える）」と言うとき、

○　くもりなき池の鏡によろづ世をすむべきかげぞしるく見えける　（『源氏物語』「初音」）

○　恋ひて泣く涙に影は見えぬるを中川までも何か渡らん　（『栄花物語』「ころものたま」）

などのように言うはずである。どちらの歌のケースも、「かげ」には係助詞が付いているが、格を明示するならば「の」に置き換えて問題ない箇所である。『伊勢物語』の当該箇所も、格関係としては「盥に影の見えけるを」とありたいところである。

また、女が和歌を詠む直前に「みづから」とあるのも気になるところである。福井『新全集』では「ひとりで」と訳されているが、訳出するならば「自分で」であろう。この段において、和歌の前で殊更に「みづから」と断っている点は、注意されてよい。これに留目した森野『文庫』は、既存の説も紹介しつつ、

①かたわらの侍女あたりが、よみそうな歌だが、自分自身でよんだところに、あわれが感ぜられるとして、「みづから」を重視する説があるが、いかが。②自分の影が映ったのを、まるでもう一人同じような他人がいるかのように、自分自身でとらえて、の気持ちか。…（中略）…あるいは、③もと、「おのづから」で、つい、しぜんと口をついて、の意を表わしたものが、「みづから」に誤ったものか。

（丸囲い数字および傍線は稿者による）

と説いている。森野以前からあった①説は当然従えないが、②説も不適であろう。③説は或る時点で漢字表記されたことを想定すればそれなりに説得力があるけれども、学習院大学蔵本以外の伝本でこの段の本文を見てみると、この「みづから」の意味する所が理解できる。先に挙げた格助詞の問題をも念頭において、大島本・日大為相本・阿波国文庫本の本文を、女の和歌の直前まで対校形式で比べてみたい。

大　むかしおとこ女のもとにひとよいきにけりまたもいかずなりにければ
相　むかしおとこ女のもとに一・夜ゆきて・・又・もいかずなりにければ
阿　むかしおとこ女のもとに・・・ゆきて・・又・・いかずなりにければ

大　女のをやはらだちてゝあらふところにぬきすをうちやりて
相　女の・・・・・・・てあらふところにぬきすをうちやりて
阿　女のをやはらだちてゝあらふところにぬきすをうちやりて

大　たらひ・・・に・・かげのみゆる・・をみてみづから
相　たらひの・・・・・かげのみえ・けるを・・みづから
阿　たらひのみづになくかげのうつりたるをみて・・・・

これらを見るに、伝本によっては、波線部「親、腹立ちて」とあることに目が留まる。この段にはもともとこの本文があり、そのままでは「女」が詠んだのか「女の親」が詠んだのか不明瞭なため、「みづから」と断ったのだと考えることはできないだろうか。定家本では夾雑物として「親、腹立ちて」が削除されたが、「みづから」が残ってしまったがために、落ち着きが悪く感ぜられるのだ、との想定は十分に可能であろう。また、格助詞の問題においても、大島本では文法的に見て正しい形の本文となっていることは注意されるべきである。このあたりの異文は複雑で、にわかには大島本が古態を留めているとは断じ難いのだが、こうした異文を視野にいれると、少なくとも学習院大学蔵本のような本文では解釈

が困難である、ということは明らかであろう。にも拘らず、ほとんどの注釈書が大島本などの本文を一顧だにせず、語義語法を無視して、定家本の本文で無理に読もうとしてきたのであった。

三、本論文の構成

ここまでに述べた問題意識から、第一章「定家本の本文を疑う」では、先に挙げた二十七段のように、定家本『伊勢物語』の本文の中で、そのまま解釈するのは不可能であると思われる箇所を取り上げて、非定家本を中心とするこれまで顧みられて来なかった諸本の本文にも光を当ててみたい。

第一節「六十三段「あひえてしかな」考」は、六十三段の「あひ得てしかな」という本文について、これが非定家本を中心とする諸本が有する「あひ見てしかな」の転訛した形であることを示す。一つの本文のこれまでの解釈を正すとともに、天福二年本『伊勢物語』を相対化しようとする試みである。

第二節「四十四段段末本文考」では、従来難解とされてきた、四十四段の段末に存する「この歌は、あるが中に面白ければ、心とどめてよます。腹に味はひて」という本文について、これが大島本や日大為相本の、「…濃き味はひ、えしも出で来じ」という本文から転訛したものであり、定家本に拠る限り正しく読解するのは不可能であることを述べる。第一節と類似した現象について取り扱うが、本節からは特に大島本や日大為相本の本文の古態性を窺い知ることができよう。

第二章「広本系諸本の本文」では、複数種現存する広本系諸本のうち、特に大島本に古態が認められるということを考察し、定家本に対置させ得る伝本としての大島本の重要性を説く。

第一節「大島本と阿波国文庫本」では、近年の研究のうち最も説得力のある久保木秀夫の論考に対し、阿波国文庫本を中心としたいわゆる広本第二類の伝本と大島本との本文校合をもとに、「阿波国文庫本→大島本」という過程を考えるよりも、「大島本→阿波国文庫本」という線で考えるべきであることを示す。

第二節「大島本と日大為相本・泉州本」では、大島本の本文や勘物・書入を日大為相本・泉州本と比較し、大島本に古態を認め得ることを述べ、大島本独自の表現世界があることをも指摘した。

第三章「『伊勢物語』と物語」では、『伊勢物語』の本文の中でも、他作品にも重出する叙述や和歌を取り上げ、主に本文における他作品との影響関係を考察する。

まず、第一節「二条后物語の成長」では、『伊勢物語』三段に存する「二条の后のいまだ帝にも仕うまつらで、ただ人におはしましける時のことなり」という本文が、『大和物語』を原拠とするものであり、「『伊勢物語』三段の成立→『大和物語』百六十一段の成立→『伊勢物語』三段に注記的本文の付加」という段階を経て現在見られるような姿になったことを指摘する。

続いて、第二節「紀有常歌の本文変成」では、『伊勢物語』十六段の「手を折りてあひ見しことを数ふれば十といひつつ四つは経にけり」という歌に関して、この歌の二句目は元来「経にける年を」であり、『源氏物語』「帚木」巻を媒介して、現在見られるような本文となったことを推定する。

一 なお、男の詠んだ歌の「かはづ」の寓意については、後藤康文『伊勢物語誤写誤読考』（笠間書院、二〇〇〇年）が百八段の「かはづ」との関わりから言及している。

二 森本『全釈』が「「たらひの影に」の助詞は、「たらひに影の」とありたい所」と指摘しているなどである。

第一章　定家本の本文を疑う

第一節　『伊勢物語』六十三段「あひえてしかな」考

一、はじめに

「つくも髪」の老女の話として知られる、『伊勢物語』六十三段。その前半部は、学習院大学蔵本に拠ると、以下のようになっている。

むかし、世ごゝろつける女、いかで心なさけあらむおとこにあひえてしかなとおもへど、いひいでむもたよりなさに、まことならぬ夢がたりをす。子三人をよびてかたりけり。ふたりのこは、なさけなくいらへてやみぬ。さぶらうなりける子なん、よき御をとこぞいでこむとあはするに、この女、けしきいとよし。こと人はいとなさけなし。いかでこの在五中将にあはせてし哉と思心あり。かりしありきけるに、いきあひて、みちにて、むまのくちをとりて、かう〳〵なむ思ふといひければ、あはれがりて、きてねにけり。

好色な女が、なんとかして情愛のある男と逢いたいものだと思い、三人の息子たちにうその夢語りをする。唯一まともに取り合って夢解きをした三男が、母をなんとかして思いやりのある在五中将と逢わせてやりたいと思う。そして三男の直訴の甲斐あって、在五中将はこの女と一夜を共にするのであった。

本節では、「世ごゝろつける女」の心内文中にある、「あひえてしかな」という本文を問題としたい。

二、先行諸説とその問題

まずは、この箇所について、現行諸注がどのように処理しているのかを確認する。竹岡『全評釈』では、当該本文の解釈をめぐるそれまでの注釈書の説が三つに分類されている。ここでもこの分類にもとづきながら、竹岡『全評釈』以後の注釈書をも視野に入れて、諸注を整理しておきたい。

①「え」をとりたてて訳さない立場

・「逢ひ得」は、ちぎりを結ぶの意。（森本『全釈』）
・結ばれたい（片桐『鑑賞』）
・逢いたいものだ（渡辺『集成』）
・結婚したいものだ（石田『文庫』）
・…逢いたいものだ（秋山『新大系』）

②「え」を補助動詞として捉え「～できる」と解する立場

・あうことができたらなあ、あいたいものだ。（池田『精講』）
・逢うことができてしまうとよいのだがなあ。（松尾・永井『校注』）
・逢うことことができたらなあ、逢いたいものだ（ママ）（中田・狩野尾『新解』）

・逢えたらいいになあ。　（大津・築島『旧大系』）
・逢うことができるようになりたいものだ　（福井『新全集』）
・逢うことができるようになりたいもの　（鈴木『評解』）

③「え」を「獲得する」の意で解する立場

・この「え」は、「え……」の「え」でなく、獲得すること。手に入れたいものだ。
（折口『ノート編』）

これらの諸注のうち、まず③の立場をとる折口『ノート編』の説は退けられるべきである。竹岡『全評釈』においても指摘されている通り、既に「あふ」というほぼ同義の語が上接していることに加え、「男を」ではなく「男に」とあるからである。この「え」を「獲得する」の意で解するのならば、以下のような形となるだろう。

むかし、いろこのむひとありけり。おとこも、さまかはらず、おなじこゝろにて、いろこのむをんなを、かれをいかでえてしかなとおもひたるを、…（後略）
（『伊勢物語』異本O段[1]）

次に①の立場であるが、これも従うことができない。いずれも原文に「あひてしかな」などとある場合なら至極妥当な解釈であると言えるが、ここには「え」という文字がある以上、それをも含めて考えることが求められよう。なお、②に分類した池田『精講』や中田・狩野尾『新解』は①にも分類し得るものであり、この「え」をどのように理解しているのか、いま一つよく分からない。

竹岡『全評釈』でも支持されている②の説は、当該本文を文法的に考えた場合、既存の三説の中では、もっとも合理的であると言える。以下、この説について、精査していきたい。

三、補助動詞としての「得」

前節で挙げた②の説は、「え」を補助動詞として捉え、「～できる」と解した上で、問題箇所を「逢うことができるようになりたいものだ」（福井『新全集』）などとするものである。この解釈が成り立ち得るのか、本節では、中古における〈動詞連用形＋得〉の用例について細かく検討していきたい。

〈動詞連用形＋得〉という形式においては、複合動詞として熟しているとおぼしいものがあり、これらは除いて考える必要があるだろう。「思ひ得」はその代表である。

A　年若き人の、さるけそうのほどなれば、いひにくきにや、返しもせず。…（中略）…四人ばかりをへだてゝゐたれば、よう思えたらむにても、いひにくし。
（『枕草子』「宮の、五節出ださせたまふに[2]」）

実方に和歌を詠みかけられ、返歌しあぐねている小兵衛を見て、作者が「四人ほど間を空

けていたので、うまく返歌を思いついても、声をかけにくい」といっている。このような「思ひ得」という形は、『源氏物語』によく見られ、いずれも**A**と同様、思考の結果として「思いつく」「分かる」ないし「判断する」の意で用いられている。

B いかでこるばかりのわざして、おどして、このかたもすこしよろしくもなり、さがなさもやめむ、とおもひて、まことにうしなどもおもひてたえぬべき気しきならば、かばかりわれにしたがふ心ならば、おもひこりなむ、と思給へえて、…（後略）

（『源氏物語』「帚木」・二十オ[3]）

C おかしからぬうたがたりをするも、こゑづかひつきづきしくてのこりおもはせ、もとすゑおしみたるさまにてうちずむじたるは、ふかきすぢ思ひえぬほどのうちぎゝには、おかしかなりとみゝもとまるかし。（同「常夏」・二十三ウ）

D 女君なをこの御中のけしきをいかなるにかありけむ、宮す所とこそ文かよはしもこまやかにし給めりしか、などおもひえがたくて、ゆふ暮の空をながめいりて、…（後略）

（同「夕霧」・四十六ウ）

Bはいわゆる雨夜の品定めの場面、左馬頭が指喰いの女について語っている場面である。このあたりを現代語で要約すれば、「本気で別れてしまいそうな素振りをすれば、懲りるに違いない、と思いつきまして」となろう。**C**は内大臣の胤である近江の君の人物紹介において、「はじめから終りまで惜しむように和歌を誦じている場合は、深い内容が分からない程度の聞きかじりなら、面白いようだと耳も留まることだよ」と言い、以下近江の君が早口であることを述べる。最後に**D**の例では、雲居雁が夕霧と落葉宮との関係を「分かりかねて」という意味で「思ひ得」という語が用いられている。『源氏物語』中には、この他にも「思ひ得」という例が多く見られ、いずれもこれまでに述べたような意で用いられている。

最後に、これまでに確認した「思ひ得」の用法をもとに、以下に示す**E**の例を検討したい。

E その人とはさらにえおもひみ（え）侍らず。人にいみじくかくれしのぶる気しきになむ見え侍を、…（後略）

（同「夕顔」・十四ウ）

この例では、「思ひ得」の上に副詞「え」があることが問題となる。大島本では本文に「み」とあり、それを見せ消ちにして、朱で「え」と記されている。『源氏物語大成』でこの箇所の異同を確認すると、青表紙本では、御物本が「きゝ侍らず」、肖柏本が「え思侍らず」となっており、河内本では「おもひえ侍らず」となっているほか、別本の陽明文庫本では「しり侍らず」となっている。こうした本文異同を踏まえ、『新日本古典文学大系　源氏物語一』[4]はこの箇所について、「誤りがあろう」と言うが、ここまで見たとおり、「思ひ得」は「分かる」などの意味を持つ複合動詞として熟しており、これに打消の表現と呼応して不可能を表わす副詞「え」が上接しても何ら問題はないと思われるのである。大島本の朱書で示された本文は十分に成立する余地があり、現代語訳をするならば、「（誰であるとは全く）分かりかねます」などとなろう。

これ以外にも、「得」を含む複合動詞としては、「聞き得」「見得」などがあるほか[5]「奪ひ

得」「尋ね得」など、動詞「得」本来の意味で用いられているものもあり、これらの「得」は「～できる」という意の補助動詞とは異なった用法であると考える必要がある。

さて、右に述べたような複合動詞を除外すると、「得」を純粋に補助動詞として用いている〈動詞連用形＋得〉の用例は、三種に分類することができる。それぞれ代表的な例を以下に掲げる。

【完了の助動詞を伴い、既に「～できた」ないし「～できている」意となる場合】

○ われ、物にぎりたり。いまはおろしてよ。おきな、しえたり。
（『竹取物語』・三十三ウ[6]）

○ うれしきもの。
…（中略）…又、我は、など思てしたりがほなる人、はかりえたる。
（『枕草子』「うれしきもの」）

○ はらひえたるくし、あかにおとしいれたるもねたし。[7]
（同「はつせに参りて、局にゐたりしに」）

○ てをかきたるにも、…（中略）…なをまことのすぢをこまやかにかきえたるは、うはべのふできえて見ゆれど、いまひとたびとりならべてみれば、猶じちになんよりける。
（『源氏物語』「帚木」・十八オ）

○ そのたどりふかき人の、いまの世におさ〳〵なければ、かたはしをなだらかにまねびえたらむ人、さるかたかどに心をやりてもありぬべきを、琴なむ猶わづらはしく、手ふれにくき物はありける。
（同「若菜下」・四十二ウ）

【連体形となり、主語として「～できかねる」の意となる場合】

○ ふかき心とて、なにばかりもあらずながら、またまことにひきうることはかたきにやあらん。たゞいまはこのうちのおとゞになずらふ人なしかし。
（『源氏物語』「常夏」・七ウ）

○ このくにゝひきつたふるはじめつかたまで、ふかくこの事を心えたる人はおほくのとしをしらぬくにゝすごし、身をなきになして、このことをまねびとらむとまどひてだに、しうるはかたくなむありける。
（同「若菜下」・四十三オ）

【打消を表わす語を伴って、「～できない」「～できそうにない」の意味となる場合】

○ この玉とりえでは、家にかへりくな、とのたまはせけり。をの〳〵おほせうけたまはりて、まかり出ぬ。たつのくびの玉とりえずはかへりくな、とのたまへば、…（後略）
（『竹取物語』二十四オ）

管見の限り、この三つの例、すなわち既成の事実を前提として、いわゆる完了の助動詞を伴う場合と、「～することは難しい」という行文で用いられる場合、そして打消の語を伴って、「～できない」の意味となる場合の三パターンに、中古和文における補助動詞としての

「得」の用法はほぼ限られているように考えられる。『伊勢物語』六十三段の「あひえてしかな」を〈動詞連用形＋得＋願望〉の形として認めることは難しいのではないかと思われるのである。

ここで問題となるのが、『万葉集』における次の例である。

天橋文　長雲鴨　高山文　高雲鴨　月夜見乃　持有越水　伊取来而　公奉而
越得之早物　（巻十三・三二四五[8]）

この歌の傍線部の本文は、諸本が一致して「越得之早物」となっているのに対し、元暦校本のみが「越得之旱物」と作る。古来難訓箇所とされているもので、荒木田久老の『万葉考槻落葉』別記[9]における指摘以来、「越」の字を「をつ」という動詞として訓むことは動かないものの、傍線部全体の訓はなお定まっていない。

久老はこの句に関して「今本牟を早に誤り、且よみをも誤れり」と言い、「越得之旱物」から「越得之牟物」へと本文を改めた上で、「をちえしむもの」と訓むべきことを提唱している。この訓は鴻巣『全釈』や『旧大系』にも採用されてはいるものの、なお主流となり得ていない。なぜならば、「もの」の直前は連体形でなければならないにも拘らず、終止形の「しむ」が上接しているという文法上の問題点を孕んでいるからである。

こうした問題を解決すべく、元暦校本にこの句が「越得之旱物」の形で存在しており、また契沖が『代匠記』において「早」を「旱」の誤りだとしていることに着目した沢瀉『新釈』は、「をちえてしかも」と訓む説を主張し、以来ほとんどの注釈書で支持されている。

この句に関して、沢瀉説が正しいのであれば、上代例ながらも、〈動詞連用形＋得＋願望〉の形を認めることとなる。しかるに、「てしか（も）」という願望表現は『万葉集』において、例えば、大伴旅人の讃酒歌の中に、

中々尓　人跡不有者　酒壺二　成而師鴨　酒二染甞　（巻三・三四三）

とあるごとく、基本的に自分自身の願望を表わす時に用いられる点が問題となる。「をちえてしかも」の場合も、これに従って訳せば、「（自分が）若返ることができるようになりたいなあ」となり、直前の「公奉而」と繋がらない。沢瀉『注釈』もこのことは念頭に置いているものの、「『若がへる事が出来ないかナア』とは云ひ得るのだからエテシカモでよいと考へる」としている。しかし、沢瀉のこの現代語訳は「てしか（も）」の原義から大きく外れる恣意的なものと言わざるを得ず、認めることはできないだろう。

また、山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』[10]は、この句について、以下のように述べている。

この場合に、他に良案もなく、ヲチエテシカモと訓むのが最も穏やかであろう。確かに、〈～テシカ（モ）〉という形式は、一般に願望の表現であって、希求の表現と見るべきものは他にない。しかし、この形式が本来願望しか表わし得なかったものかどうかは保証の限りでなく、古くは希求をも表現し得た形式であったかも知れない。この歌の含まれている巻十三は、古体の歌の多いことで知られている。あるいは、ここのヲチエテシ

カモは、〈〜テシカ（モ）〉の古い用法を残したものであろうか。

山口は、この歌が「古体の歌」であり、「をちえてしかも」を希求の表現であるとした上で、「〈〜テシカ（モ）〉の古い用法を残したもの」である可能性に言及している。一方で、「若返る」意の動詞「をつ」の用法などから、曽倉『全注』のように、この歌には「後期的」性格が認められるという指摘もあり、山口の言うようにこの歌が「てしかも」の古い用法を残しているとするには、なお問題があると言えるだろう。

そもそも、契りを交わしたいと冀うのであれば、「あひてしかな」と言えばそれで足りるのであり、ここへさらに可能の補助動詞「得」を伴うのは不自然である。実際、『夜の寝覚』に、

「文をやるとも、『げに』と、うけひくべき人もなし。対の君にいかであひてしがな」と思へど、ひまあるべくもなし。

といった行文が見られる通りである[11]。

以上により、『伊勢物語』の問題箇所における「得」を、「〜できる」という意味の補助動詞として認めがたいことが確認されたと思う。この箇所について、「あひえてしかな」の本文のまま、諸注のごとく解釈することはできないのである。

四、誤写の可能性

ここまで、〈動詞連用形＋得＋願望〉という語構成に着目して諸例を検討し、当該本文の「え」を補助動詞として「〜できる」の意と捉えた上で、「逢うことができればなあ」などと解することはできないことを論じてきた。「あひえてしかな」とある学習院大学蔵本の本文のみにとらわれずに解釈を模索する必要があると思われる。

そこで、当該本文は元来「あひみてしかな」とあったものが、書写のある段階で「あひえてしかな」と誤写されたものではなかったか、と考えたい。

「み」から「え」への転訛については「三(み)」と「衣(え)」との字形相似に起因するものと考えることができる。両者の字形が似ており、誤写を惹起しやすいことの証左として、ここでは「え」が「み」に誤られた例を、『蜻蛉日記』から挙げておこう[12]。

○　心ざしありしはなをおりてうちのかたよりあるをみれば、心たゞにしもあらで、てならひにしたり。

まつほどのきのふすきにしはなのみはけふをることぞかひなかりける

（上巻・天暦十年三月）

桃の節句に兼家が訪れず、作者が翌日それを恨んでいる場面である。宮内庁書陵部本では右のような本文になっているのだが、東大本や学習院本においては、「はなのえ」となっている。ここは「はなのみ」と限定の意で解釈した場合、歌意が理解しにくくなってしまう。

東大本などのように「はなのえ」とあるのが正しい。書写のある段階で「み」を「え」と誤ってしまったものであろう。

次の一例も、「え」が「み」に誤られてしまったものと考えてよい。

○　さむしろにしたまつこともたみぬればをかむかたゞになくぞ悲しき

（中巻・天禄二年六月）

兼家が訪れないことを恨み、薬を挟んでいた畳紙に書きつけた歌である。ここも、宮内庁書陵部本では「たみぬれば」となっているのであるが、国会図書館上野支部本や大東急記念文庫本で「たえぬれば」となっていることを参照するまでもなく、「え」から「み」への誤写としか考えられない部分である。さきに見た例は、「はなのみ」という本文でも、日記本文の内容に整合するか否かは措くとして、意味じたいは通じるものであった。しかし、この例では「たみぬれば」などという本文では全く文意不明となってしまう。それにも拘わらず、このような異文が生じてしまったということは、両字の草体がきわめてよく似ており、誤写を惹起しやすいことを物語っている[13]。

当該本文を「あひみてしかな」と立てた場合、それをどのように解釈すべきなのであろうか。「あひ見る」の語義は先学によって既に指摘されている部分も多いが、私家集などにまで調査範囲を拡大し、改めて検討しておきたい。

「あひ見る」の用例については、すでに中川正美「「あひみる」考――源氏物語を中心に――」[14]で明らかにされている通り、特に散文中では肉親同士の生別・死別といった場面をはじめ、既知の間柄に関して用いられる場合が圧倒的に多く、恋愛の文脈においても、一度逢瀬を持った後の男女について、この語が用いられる場合がほとんどである。例えば、『源氏物語』「帚木」巻では、空蝉と関係をもった直後の源氏の心内文中に、以下のような形で用例が見られる。

○　殿にかへり給ても、とみにもまどろまれ給はず、またあひみるべきかたなきを、まして、かの人のおもふらん心のうちいかならむ、と心ぐるしくおもひやり給ふ。

（五十二オ）

もちろん、初めての逢瀬についても「あひ見る」と表現することはあり、和歌中のものならば中川自身も挙げている有名なものとして、

○　あひ見てののちの心にくらぶれば昔は物もおもはざりけり

（拾遺集・恋二・七一〇・権中納言敦忠）

といった例があるほか、歌集の詞書においても、

かたらふ人に、あひみてのち、みそめずはといひたるに

○　後まではおもひもあへず成りにけりただときのまをなぐさめしまに

（和泉式部続集・四一三）

のように、初めての逢瀬を持つことを指して、「あひ見る」と言った例はいくつも存在する。ただし、中川は『拾遺集』七一〇番歌の例について、

このように恋歌でも「あひみる」は既知の間柄、一度は結ばれた者どうしに用いられている。

としており、詠作の時点では既知の間柄である、ということに重きを置いて解しているようである。

しかるに、一度も逢ったことのない相手に対して「あひ見る」という表現を使うことが全く無かったわけではなく、『源氏物語』「常夏」巻に、恋の歌ではないものの、次のような例を拾うことができる。

○　（前略）…うらには、まことや、くれにもまいりこむと思ふ給へたつは、いとふにはゆるにや、いでや／＼、あやしきは、みなせがはにを、とて、またはしにかくぞ、

くさわかみひたちのうらのいかゞさきいかであひみんたごのうらなみ

おほかはみづの、…（後略）　（二十五才）

近江の君が父内大臣の意向で異腹の姉弘徽殿女御のもとへ出仕する際の挨拶文である。ここでは、未だに顔を合わせたことのない女御に対して、「いかであひみん」と言っている。これに関して中川は、

「あひみる」表現を取った、君の思い入れが問題なのである。おそらく、近江君は女御は異腹であっても、我が身にとって親しい大切な方、しかも帝の女御という憧れの地位におられる方と思い、自分のことを気にかけて下さっている、心配して対面したいと思っていて下さると信じて疑わなかったのであろう。しかし女御のほうはそうでなかった。姉妹としての愛情を一方的に押し付けられ、再会を願っているはずと信じ込まれて困惑したのである。

と述べ、「あひ見る」が既知の間柄でのみ用いられる語であるという線で理解しようとしている。確かに、詠作の段階ではまだ逢瀬を持っていないと思われる、

○　今ははやこひしなましをあひ見むとたのめし事ぞいのちなりける　（古今集・恋二・六一三・ふかやぶ）

○　あひ見てはしにせぬ身とぞなりぬべきたのむるにだにのぶるいのちは　（拾遺集・恋一・六九二・よみ人しらず）

の二首も、それぞれ「たのめし事」「たのむるにだに」と、相手が逢瀬を期待させていることが示されており、中川がいうように、「恋の最終段階に達して」いる既知の女性について

「あひ見る」の語を用いているものの、

○　しぬるいのちいきもやすると心みに玉のをばかりあひみてしかな
（古今六帖・三二〇七・おきかぜ）

などのように[15]、必ずしも「恋の最終段階に達して」いるとは断定し難い例もあり、『源氏物語』の近江の君の和歌にも鑑みれば、未知の相手に対しても「あひ見る」という語は用いられ得るということができるのである[16]。

また、未知・既知に拘らなければ、〈人に＋あひ見る＋てしかな〉という型は和歌の常套的な表現であったらしく、

○　かげにのみのこれるゆきのきえはてぬさきにも人にあひみてしかな（敦忠集・三一）
女につかはしける

○　おほしまに水をはこびしはや舟のはやくも人にあひみてしかな
（後撰集・恋四・八二九・大江朝綱朝臣）

○　朝ごとにいくみの川のみをたえずこひしき人にあひみてしかな（古今六帖・一五三八）

○　したきゆるゆきまのくさのめづらしくわがおもふ人にあひみてしかな
（後拾遺集・恋一・六三五・和泉式部）

などのように、主に様々な序詞に導かれる形で、その例を見ることができる。以上のことから、『伊勢物語』の当該箇所も、「あひみてしかな」と本文を改訂し、つくも髪の女が「なんとかして思いやりのある男に会いたいなあ」と庶幾しているのだと考えるべきではなかろうか。

五、学習院大学蔵本以外の本文

ここまで、問題の本文が「あひみてしかな」の転訛したものである可能性を論じた。そこで本節では、学習院大学蔵本以外の諸本の本文に目を向けてみたい。学習院大学蔵本以外の定家本・広本・真名本・本間美術館蔵本には当該箇所に異文が見られ、主なものを一覧すると、以下の通りとなる。

【定家本】
○九大本……いかてこゝろなさけあらんおとこにあひみてしかな
○伝為家筆本[17]……いかて心なさけあらむおとこにあひみ（又定え）てしかな
○為相奥書本……いかて心なさけあらむおとこにあひみ（え）てしかな（※傍線は見せ消ち）
○建仁二年本……いかて心なさけあらんおとこにあひ見てしかな
【広本第一類[18]】
○大島本……いかて心なさけあらむおとこにあひみ（えイ）てしかな

○日大為相本……いかてこゝろなさけあらんをとこにあひ〇（み）てしかな（※〇は補入）

【広本第二類】

○阿波国文庫旧蔵本…いかてこゝろなさけあらんおとこにあひみてしかな

○谷森本……いかてこゝろなさけあらんおとこにあひみてしかな

○神宮文庫本……いかてこゝろなさけあらんおとこにあひみてしかな

○日大本……いかてこゝろなさけあらんおとこにあひみてしかな

【広本第三類】

○泉州本……いかてこゝろなさけあらんおとこにあひみてしかな

【真名本】

○寛永版本……何心情将在壮士尓會見字哉

○旧本伊勢物語……以加泥情有武夫仁會見而之我那

【本間美術館蔵本】

○本間美術館蔵本……いかてこのなさけある男をかたらひてしかな

ここに掲げた定家本は、いずれも「抑伊勢物語根源…」の奥書を持つもの[19]で、九大図書館本、伝為家筆本、為相奥書本は分類上根源本系統の諸本とされる。この他に非定家本の代表的伝本の多くが、「あひみてしかな」の本文を取っていることが分かる。本間美術館蔵本の「かたらひてしかな」は独自異文であるが、定家本系の「あひえてしかな」といった本文を疑問に思った書写者が通じやすい本文に改めたものであろうか。

また、真名本を重要視する江戸期の新注に目を向けると、『伊勢物語古意』が「今本の詞たがへる事多し。みだれたる本のまゝをうつし伝へし也」とした上で、「今本」の本文を却下しているほか、藤井高尚の『伊勢物語新釈』も、「あひ見てしがな」と、真名本の本文をそのまま採用している[20]。

ところで、本節と同じく、定家本『伊勢物語』に内在する誤写を指摘したものとして、後藤康文『伊勢物語誤写誤読考』[21]所収の諸論考がある。この中の前編・第七章「見出づ」と「し出づ」（第四十一段）もその一つである。四十一段は、男がその義妹の窮地を救うべく、「いときよらなるろうさうのうへのきぬ」を探しだして歌とともに贈ってやったことが話題となっているのだが、後藤はこの章段の「見いでゝ」という本文につき、このままでは、「たまたま見つけて」贈ったことになってしまうが、これでは男の「深切なる赤心は伝わってこない」とし、「し出でて」という本文に改訂してはじめて、和歌にも見られるような、「縁者に寄せる深い慈愛」を汲みとることが可能なのだと説いている。そして広本系の諸本に目を向けた上で、大島本が「しいでゝ」という本文であることを指摘しているのであるが、他本に見られないためか、後藤は、

この本文自体についていえば、二重の誤写が起こって偶然先祖帰りしたものと考えるのが妥当なのだろうけれども…（後略）

という慎重な立場に立っている。

あるいは、同著前編・第五章「「なりての世に」と「なりてのちに」(五十五段)」では、「(えうまじう)なりての世に」という言いまわしは当時の語法では有り得ないことを用例調査によって立証し、「なりてのちに」という本文への改訂を説いている。従うべき見解であるが、こちらも広本第一類の伝本ないしは伝肖柏筆本という重要な写本において「なりてのち」という本文が見られることに言及しているにも拘らず、この本文を伝える伝本の少なさからか、

> それが〈原形〉の生き残りなのかどうかは不明とするほかあるまい。だがたとえ、大島本や顕昭本の当該本文が後代の合理的改変に由来する産物にすぎないとしても…(後略)

と述べている[22]。

しかし、当該「あひみてしかな」の場合に関して言えば、広本系諸本で一致することをはじめ、多くの伝本がこのような本文を有していて、少なくともこの箇所においては、それらの諸本の古態性を積極的に主張してもよいのではなかろうかと思われる。

六、おわりに

最後に、これまでの論旨を反映させた形で、学習院大学蔵『伊勢物語』六十三段の冒頭部を掲出したい。

> むかし、世ごゝろつける女、いかで心なさけあらむおとこにあひみてしかなとおもへど、いひいでむもたよりなさに、まことならぬ夢がたりをす。

学習院大学蔵本『伊勢物語』の「あひえてしかな」という本文は、検討の結果、「あひみてしかな」という本文が妥当であり、そうあってはじめて、好色な女の心内文を正しく解釈できるのである。また、「あひみてしかな」という本文は、主に非定家本を中心とする諸本に多く見られるものであり、それらの伝本が学習院大学蔵本よりも古い形をそのまま伝えていると考えるのが妥当である。

本稿で示した本文改訂案は、一字のみの小さな問題であることは否めないが、注目したいのは、学習院大学蔵本以外の伝本の多くに、稿者の想定と全く同一の本文が見られることである。現在、『伊勢物語』は専ら学習院大学蔵本によって読まれているものの、その本文には読解困難な箇所が多く含まれている。本稿の指摘したような箇所に留まらず、『伊勢物語』全体の理解に関わる部分に関しても、いわゆる広本系統や真名本をはじめ、従来本文解釈上あまり重視されてこなかった異本の本文を手掛かりに、解釈の糸口をつかむことのできるところは『伊勢物語』には多く残されていると思われる。向後の『伊勢物語』研究においては、本文読解の作業でも、かかる異本に目を配り、解釈を模索していくことが求められるの

ではなかろうか。

1 章段番号については、『伊勢物語に就きての研究　補遺篇　索引篇　図録篇』（有精堂、一九六〇年）のアルファベット記号で示した。

2 『枕草子』の本文は、杉山重行『三巻本枕草子本文集成』（笠間書院、一九九九年）に拠るが、適宜私に句読を切り清濁を分かつものとする。

3 『源氏物語』の本文は、『大島本　源氏物語』（角川書店、一九九六年）所収の大島本の影印に拠る。翻字にあたっては注1と同様の処置を施す。

4 岩波書店、一九九三年。

5 「聞き得」は、「聞いて理解する」意で、『土左日記』や『うつほ物語』「内侍のかみ」巻に（後者は謙譲の意を伴う「承り得」の形で）見える。また、『枕草子』にも二例あるが、こちらはいずれも「聞くことができる」の意味で用いられていると思しい。ただし、この二例にはともに「たり」が下接しているという特徴（後述）がある。「見得」は、主に敬語表現が伴った「御覧じ得」「見給へ得」などの形で『源氏物語』に見られ、「見つけ出す」「見出だす」といった意味で用いられている。

6 『竹取物語』の本文は、『天理図書館善本叢書和書之部29』（八木書店、一九七六年）所収の武藤本の影印に拠る。

7 能因本や堺本に無く、三巻本のみが有するこの本文はやや難解で、諸説入り乱れているところであるが、池田亀鑑・岸上慎二『日本古典文学大系　枕草子』（岩波書店、一九五八年）や萩谷朴『枕草子解環五』（同朋舎、一九八三年）などは、「掃ひ得たる櫛、垢に落とし入れたるもねたし」（やっと綺麗にできた櫛を、たまった垢の中に落とし入れてしまうのも癪だ）と解しており、現行諸注の中では最も合理的である。萩谷は、他諸注の一部が取り上げている、「祓ひ得たる串、閼伽に落とし入れたる…」という説につき、「祓え」「串」が神道ないし陰陽道の用語、「閼伽」が梵語に基づく仏教用語であることから、これを「氷炭相容れぬ無理な読み方」と批判している。

8 『萬葉集』の歌番号と本文および訓は、『萬葉集』（塙書房、一九六三年）の補訂版（一九九八年）に拠る。

9 『万葉考槻落葉』は、『万葉集叢書』所収の本文、『万葉代匠記』は、『契沖全集』所収の本文に拠る。本稿で引用する近代以降の『万葉集』の注釈書の略称は、以下の通り。沢瀉久孝『萬葉集新釋　下巻』（星野書店、一九三一年）→沢瀉『新釈』、鴻巣盛廣『萬葉集全釋第四册』（廣文堂書店、一九三三年）→鴻巣『全釈』、高木市之助・五味智英・大野晋『日本古典文学大系　萬葉集三』（岩波書店、一九六〇年）→『旧大系』、沢瀉久孝『萬葉集注釈　巻第十三』（中央公論社、一九六五年）→沢瀉『注釈』、曽倉岑『萬葉集全注　巻第十三』（有斐閣、二〇〇五年）→曽倉『全注』

10 有精堂、一九八五年。

11 阪倉篤義校注『日本古典文学大系　夜の寝覚』（岩波書店、一九六四年）の校訂本文に拠る。

12 『蜻蛉日記』本文は、上村悦子『蜻蛉日記校本・書入・諸本の研究』（古典文庫、一九六三年）に拠り、校異もこれに従ったが、適宜表記を改めた箇所がある。

[13]これ以外にも、前節で取り上げたEの用例「えおもひえ侍らず」が、大島本では本文に「み」とあり、朱書で「え」となっていることも、字形相似に一因を求めることができそうである。

[14]『国語語彙史の研究十四』、和泉書院、一九九四年。以下、中川の言説は全てこの論文から引用した。中川には「あひ＋動詞」という語構成についての一連の論考がある。

・「「あひみる」表現の生成と展開――古代恋歌の表現史――」（「梅花短大国語国文」七巻、一九九四年十月）

・「「あひ思ふ」「あひ語らふ」「あひ知る」考―古代における「あひ」を冠した動詞の諸相と表現―」（「梅花短期大学研究紀要」四十三巻、一九九五年三月）

[15]この歌は寛平御時后宮歌合で詠まれたもので、『古今集』にも採られている。下句は伝本によって異同が甚だしいものの、『校証　古今歌六帖』（有精堂、一九八四年）によって校異を確認すると、『古今六帖』では下句の本文が一致して掲載したような形となっている。

[16]この他、時代はややくだるものの、『頼政集』六二九番歌の詞書に、男女の恋愛ではないけれども、未知の関係における以下のごとき例があり参考になる。

少別当入道空仁と申す歌読む物侍ると年比ききわたり侍るに、かれもききてたがひにいかであひみてしかなと思ひけるほどに、歌林苑にて人丸の影供し侍りける日、あひて歌読みなどして後ほどへて云ひつかはしける、…（後略）

また、『躬恒集』のいわゆる光俊本系と丙本系の本では、深養父と人真との歌会で詠まれたものとして、

おとにのみきけばかひなしあふみなるいかごのいかであひみてしかな　（三五三）

の歌が採られている。上句「おとにのみきけばかひなし」から、まだ交際を始めていない意中の女性に対して「あひみてしかな」と言っていることが明らかな例である。

[17]為家が伝称筆者である『伊勢物語』の伝本は複数存在するが、ここに掲げたのは山田清市『伊勢物語校本と研究』（前掲）で根源本第五系統に分類されている本である。

[18]広本の分類は、福井貞助『伊勢物語生成論』（有精堂、一九六五年）に拠る。

[19]このような奥書を持つ定家書写の『伊勢物語』を、「根源本」として一括する向きについては、片桐洋一の批判もある（『冷泉家時雨亭叢書41』所収の建仁二年本の解題など）。

[20]両注釈書の本文は、竹岡『全評釈』所収のものに拠る。

[21]笠間書院、二〇〇〇年。

[22]引用文中の「顕昭本」とは、実際には大島本と同じものである。よって、「なりてのち」という本文を伝えるのは、大島本、日大為相本、伝肖柏筆本の三本となる。

第二節『伊勢物語』四十四段段末本文考

一、はじめに

『伊勢物語』四十四段は、地方へ赴任する知人のために、送別の宴を催し、その人物の前途を寿ぐ歌を詠みおくる、といった内容の章段である。はじめに、この章段の全文を、現在最も広く読まれている学習院大学蔵本に拠り掲出する。

むかし、あがたへゆく人に、むまのはなむけせむとて、よびて、うとき人にしあらざりければ、いゑとうじ、さかづきさゝせて、女のさうぞくかづけんとす。あるじのおとこ、うたよみて、ものこしにゆひつけさす。

いでゝゆく君がためにとぬぎつれば我さへもなくなりぬべきかな

このうたは、あるがなかにおもしろければ、心とどめてよます。はらにあぢはひて。

本節で問題とするのは、段末に存する「このうたは…」以下の本文である。作中屈指の難解箇所として知られるこの本文をどう考えるべきなのか、先行研究を整理・検討した上で、当該箇所の本文異同をも視野に入れつつ、私見を提示する。

二、諸注の解釈と諸本の本文

当該本文の解釈に関しては、現行の諸注の見解をおよそ四つに大別できる。近代以降の諸注のうち、代表的なものを掲出する。

①「…心とどめてよます。腹に味はひて」と解する

・この歌は、たくさんあるもののうちで面白いものだからして、注意してよませる。腹によく味おうて。　（折口『ノート編』）

・たくさんある歌のなかでも、特に感興をそそられるから、よく気をつけて読ませる。腹のなかで十分に吟味して…。　（秋山『新大系』）

・この歌は、その宴で詠まれた歌の中で特に趣きがあったので、愛着の念をもって朗誦させる。腹に味わうように朗誦させたのである。　（片桐『全読解』）

②「…心とどめてよまず。腹に味はひて」と解する

・この歌は、その場で詠まれた沢山の歌の中でもとりわけ面白いので、特に心を用いて詠むようなことはせずに、腹に味わって詠む。　（中野・春田『全釈』）

・この歌は、数ある歌の中でも趣ある歌だから、念入りに吟じたりせずに、腹の中で味わって（理解せよ）。　（石田『注釈稿』）

③「…心とどめて（返歌を）詠まず。腹に味はひて」と解する

・感動の心を残し、返歌はよまず、…有難くうけとった　（渡辺『集成』）

④「…心とどめてよ。まづ腹に味はひて」と解する

→この説を積極的に支持する注釈書は無いが、松尾・永井『校註』および上坂『評解』において、可能性として示唆されている。

これらのうち、④は「ず」と「づ」との仮名遣いの違いによって、まず退けられるべきであろう。残る①～③の立場は、いずれも解釈としては成り立ちそうにも見えるが、『伊勢物語』の段末本文には当該箇所を除いて接続助詞「て」で終止するものは存在せず、この本文はきわめて特異なものであるといえる。このことに加えて、後に指摘するように、「腹に味はふ」といった語構成は平安時代の和文としては不可能なものと考えられるため、右に掲出した諸注の見解にとらわれず考究する必要がある。

そこで、当該の段末本文について、諸本間の異同を確認してみたい。学習院大学蔵本と異なる本文を持つ諸本のうち、代表的なものを以下に示す。

A　「この歌は…」以下、段末本文全てを欠く

・藤房本
・伝民部卿局筆本

藤房本は、八十七段までを万里小路藤房が書写し、それ以降は堯孝所持本により一条兼良が補写したものとされ、他本に比して和歌の出入りや本文の面で特殊な伝本である[二]。当該箇所については、「このうたは…はらにあぢはひて」という学習院大学蔵本と同様の本文が、本行本文ではなく上部の余白に細字で記されている。親本に存在せず、他本に拠って後から補ったものか、単に転写の際に見落としてしまったものを書写者がここに書き足したものか、今一つはっきりしない。

一方、伝民部卿局筆本に関して見ると、この本と同系統の不忍文庫本、群書類従本、丹表紙本でも段末本文全てを欠いており、こちらの系統の伝本は段末本文全てを欠く本文であったことが知られよう。

B　「腹に味はひて」を欠く

・阿波国文庫旧蔵本
・伝二条為明筆本

阿波国文庫旧蔵本は、いわゆる広本系統の第二類を代表する伝本である。この系統に属する、神宮文庫本、谷森本、日大本も全て同様の本文である[三]。

この他、山田清市『伊勢物語校本と研究』[四]において根源本として校異の挙げられている

伝二条為明筆本も、「心とどめてよます」で段を終わらせている。

C　段末本文が「心とまりてなんかきつけたる」となっている

・屋代弘賢『参考伊勢物語』所引の伝為家筆本

このような本文を持つ伝本は他に見られず、完全な独自異文である。『参考伊勢物語』所引の伝為家筆本は、特異な章段排列を持つ重要な伝本ではあるが、現在散佚してしまっており、当該箇所についてもにわかには断じ難い。

D―1　「腹に味はひて」が、「…は、濃き味はひ、えしもいでこじ」となっている

・大島本
「このうたは、あるがなかにおもしろければ、心とめてよまずは、こきあぢはひ、えしもいでこじ」
・日大為相本
「このうたは、ある中にをもしろければ、こゝろとゞめてよまずは、こきあぢはひ、えしもいでこじ」

D―2　「腹に味はひて」が、「…はこき味はひて」となっている

・伝二条（京極）為兼筆本
「この歌、あるがなかにおもしろければ、心とゞめてよます。はこきあぢはひて」

D―3　「腹に（味はひて）」という本文と「濃き味はひ」という本文とをともに有する

・武者小路本
「この哥は、あるがなかにおもしろければ、心とゞめてよます。こきあぢはひはらにありて」
・真名本（寛永二十年版本）
「此歌者、或之中尓面白計礼者、心留而不讀者、腹尓深味毛出不来」
・島原文庫本『和歌知顕集』所引本文
「此哥は、あるが中におもしろければ、心とゞめてよます。はらにあぢはひてこきあぢはひなるべし」

ここで注目するべきは、「濃き味はひ」などといった本文を含むDに分類した諸本である。D―1の大島本と日大為相本とは、定家本に見えるような「腹に…」という本文が無いかわりに、「濃き…」という本文を有している。D―2の伝為兼筆本は、前記両本とはやや形が異なるが、これに関しては後に考察したい。

一方で、D―3に分類したものは、『知顕集』所引本を含めて、定家本のような「腹に…」という本文に加えて、大島本などに見える「濃き…」といった本文をも含んでいる。藤井高尚『伊勢物語新釈』は、これらの異文について、以下のように言及する。

・知本にかくあり。今のかな本は脱文ありて聞えず。真本は大かたよろしけれど、知本におよばず。

「知本」（『知顕集』）や「真本」（真名本）の本文を取り上げて、前者の本文を採用しつつも、後者の本文にも一定の評価を与えている。しかるに、大島本・日大為相本をも視野に入れて考えた場合、「腹に…」という本文と「濃き…」という本文とをともに有しているD―3の本文は、混成本文であると考えてよいだろう。なぜならば、『知顕集』などの形が本来のものとすれば、定家本などの大多数の伝本と大島本や日大為相本などの伝本とで、「腹に…」という本文と「濃き…」という本文とをまるで示し合わせたかのように分かち伝えたこととなるからであり、そのような可能性は極めて低いのではないか。ここは元来「腹に…」系の本文と「濃き…」系の本文とが対立本文としてあり、D―3の伝本はその両方を取り入れた、と考えておくのが適切だろう。

これらの異文について、折口『ノート編』は、大島本の本文に注目しつつも、「ここは攙入にちがいない」「攙入の文章のためにもつれるのは、へんなことだ」と判断を放棄し、石田『注釈稿』は「これらの異文（ないのをも含めて）、さして有力とも思われず、やはり原文のままで解を試みるよりほかないようである」と言う。しかるに、従来の注釈においては、「腹に味はふ」及び「濃き味はひ」の両本文が、平安時代の語法として有り得るか否かを精査することが手続きとして欠けていたと思われる。

三、「腹に味はひて」か「濃き味はひ」か

本節では、平安時代の語法として、「腹に味はひて」という表現が可能であったか、また「濃き味はひ」という表現が可能であったか、ということについて検討する。両者の相違点として、学習院大学蔵本などの本文では「味はふ」という動詞の連用形「味はひ」が用いられているのに対して、大島本のような本文では名詞として「味はひ」という語が用いられているということが挙げられる。

そこでまず確認したいのは、石田『注釈稿』が「味はふ」という語に関して、「訓点語系統の語」だと指摘している点である。「味はひ」とあわせて、古辞書類や訓点語彙などの用例をも視野に入れて見ていきたい。

黒川本『色葉字類抄』を見ると、以下のような記述が確認された[五]。

・味【アチハフ／アチハヒ／滋―五―】

また、観智院本『類聚名義抄』においても、

・味　アチハヒ（フ）　ムサホル　クチヒル　クチサキラ

とされており、名詞・動詞ともに当時用いられていたことが知られる。

はじめに、動詞としての「味はふ」から検討する。和文において動詞「味はふ」は極めて寡例といってよく、中古の物語・仮名日記・和歌の詞書などにおいては管見に入らなかった。ただし、『和漢朗詠集』には、

将軍
職列虎牙　雖拉武勇於漢四七将
学抽麟角　遂味文章於魯二十篇　（六八六、源順）

といった漢詩が収められており[六]、傍線部の訓読は、「遂に文章を魯の二十篇に味ふ」で動かない。ここは動詞「味はふ」の確例としてよいように思われる。

このように、動詞「味はふ」は漢文の訓読において少ないながらも用いられていたことが確認されたが、先に述べた通り和文には見られない語であることに加え、「腹に味はふ」という語構成を取る例は皆無であった。よって、「味はふ」という動詞の例は認め得るとしても、『伊勢物語』の問題箇所を「腹に味はひて」とするのは、難しいのではなかろうか。

一方で、「味はひ」という名詞については、物語をはじめとする中古の和文において、以下のような例を拾うことができた。

同じころ、さぶらひにおろしの盤出ださせ給ふに、土器に雪を盛りて、みくりを箸にて、結いつけて入れたる、さぶらひより、

A　飯の色の白きはいはじ味はひのくくめば消ゆる心地こそすれ（『大斎院前の御集』五五）

B　…わが身は今は苔の衣にやつれて、松の葉をあぢはひにて過すやうなるに、うちそひて、鳥の音だになごやかには聞こえぬ山ふところにうづもれて、…　（『浜松中納言物語』巻三）

C　…久世の鳥、交野の鳥の味はひ、参り知りたりき。　（『大鏡』）

D　…心をばなぐさの浜に寄せ、かたちをばかひある様にもてなして、面白きことを心にこそ思へ、誰にかは言はむ。めづらしき言の葉を言ひ出でたれど、誰かかしらを傾け、深きあぢはひをも知らむ。　（『賀茂保憲女集』序文）

E　…それにつけても、（注：源氏ガ）世中にのみめでられ給へば、きさいの宮きこしめして、いみじうの給ひけり。おほやけのかうじなる人は、心にまかせてこの世のあぢはひをだ

にしる事かたうこそあなれ、おもしろきいへゐして、世中をそしりもどきて、かのしかをむまといひけむ人のひがめるやうに、ついせうする、など、あしきことゞもきこえければ、わづらはしとて、せうそこきこえ給ふ人なし。

（『源氏物語』「須磨」四十二オ）

これらのうち、A～Cの例は、一見して明らかな通り、「食物の味」（A・C）もしくは「食物そのもの」（B）の意で解すべきものである。平安時代、「味はひ」という名詞は、ほとんどこのような意味で用いられている。

ところが、Dの例はここまで見たA～Cと異なり、「味はひ」を「物事の趣」といった意で解さなければならないものである。『賀茂保憲女集』は現存するいずれの伝本も本文の損傷が激しく、いわゆる異本系統では序文の一部が欠脱している等問題はあるのだが、当該部分は流布本・異本ともに有する本文である。「めづらしき言の葉」の「深きあぢはひ」とある以上、この「あぢはひ」は「物事の趣」として捉える必要があろう。

これを踏まえると、Eに掲げた『源氏物語』の例も、Dの類例であると考えられる。須磨に配流された源氏が風流に過ごしていることが、弘徽殿女御の逆鱗に触れる場面で、女御の発言内に見える「あぢはひ」は、『源氏物語』諸注や、各種辞典類の「味はひ」の項において、「食物の味」と解するか、「物事の趣」と解するかで割れている箇所である[七]。しかし、Dに「物事の趣」の意の確例がある以上、ここも同様に考えるべきではなかろうか。弘徽殿女御は、「勅勘を被っている者は、この世の趣を知ることさえ難しいというのに、そのように趣ある家構えをするだけでなく、世の中を悪く言い、周囲の者も源氏に迎合している」と怒りを露わにしているのであろう。このように、名詞「味はひ」の例は、「物事の趣」といった意味のものを含めて、平安時代の和文に見出だすことができる。

また、和文における例ではないものの、仏法の奥深い妙味を指す「法味（ノリノアヂハヒ）」という語についても併せて見ておきたい。

○　已ニ食ヒ物ヲ持テ魚ノ飢ヲ助ケツ。又法ノ味ヲ施シテ後ノ身ヲ導。ト思テ、池中ニ下リ立テ魚ノ為ニ法ヲ説ク。

（『三宝絵』上）

流水という長者が、樹神の命に従い、魚たちを救う場面で、「法の味（ノリノアヂハヒ）」という語が見える。「食ヒ物」を与えたことと対比する形で、法の「味」という表現がとられていると考えられるが、これも原義である「食物の味」という意味を比喩的に広げ、「味」を「物事の趣」に近い意味で用いている例であると言えるだろう。

さらに、大島本および日大為相本『伊勢物語』と同様の、「こきあぢはひ」という語構成も、管見の限り「食物の味」の例のみではあるが、経典や漢籍を訓読した文献に見出だすことができた。

○　非時降霜雹　飢疫苦流行　穀稼諸果實　滋味皆損減　於其國土中　衆生多疾病
【非時に霜雹を降すと、飢疫の苦流行せむとして　穀稼諸の果實の滋キ味ひ皆損減すると、其の國土の中にある　衆生疾病多かルコトト有む】　（西大寺本『金光明最勝王経』八）

『最勝王経』は平安時代の文学作品に多くその名が見え、広く知られた経典である。いま掲げた本文中の傍線部「滋味」は、【　】内に示した通り、平安初期に付された白点で「コキアヂハヒ」と訓まれている。

「コキアヂハヒ」は、黒川本『色葉字類抄』にも取り上げられている漢語「滋味」を訓読したものであると考えられるが、漢籍においては、

○　伊尹名二阿衡一。阿衡欲レ干レ湯而無レ由。乃爲二有莘氏媵臣一、負二鼎俎一、以二滋味一說レ湯、致二于王道一。
【伊尹、阿衡と名づく。阿衡、湯に干めんと欲すれども由無し。乃ち有莘氏の媵臣と爲り、鼎俎を負ひ、滋味を以て湯に說き、王道を致せり。】　（『史記』殷本紀三）

○　夫聲色・滋味・權勢之於レ人、心不レ待レ學而樂レ之、體不レ待レ象而安レ之。
【夫れ聲色・滋味・權勢の人に於ける、心は學ぶを待たずして之を樂しみ、體は象るを待たずして之に安んず。】

（『莊子』盜跖第二十九）

といった用例が見られる九。『史記』が我が国で広く受容されていたことは、『枕草子』「頭弁のしきにまいり給て」の段にある、孟嘗君の故事を引いた有名な記述からも知られ、さらに『史記』の当該箇所について、高山寺本で「滋味」（コキ）となっている一〇ことからこの箇所は「コキアヂハヒ」と訓まれていたと考えてよい。

また、『莊子』「盜跖」篇に関しても、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』などにこれを原拠とする話が見られ、説話の世界で好まれた題材であることが知られるし、『源氏物語』「胡蝶」巻においても、

○　右大将（注：髭黒）の、いとまめやかに、こと〳〵しきさましたる人の、こひのやまには、くじのたうれまねびつべきけしきにうれへたるも、さるかたにおかし、とみなみくらべ給なかに、…（後略）　（十二オ）

という形で引かれている。「くじのたうれ」（＝孔子の倒れ）については、大島本『源氏物語』の行間書入に「孔子のたうれといふ事、昔より世のことわざにいひつたへたり。聖人なれども、時としてたうるゝことのあるごとく、髭黒大将、実なる人なれど、恋山に入て

まどふ、といへり」とある通りである。孔子が盗跖という悪人にやりこめられるという点が、人々の興味を引いたのであろう。

以上、『最勝王経』、『史記』、『荘子』といった、当時においても著名な典籍に「滋味」という語が見え、それらは当時の人々によって「コキアヂハヒ」と訓まれていたらしいことが確認できた。『伊勢物語』四十四段においても、元来は大島本のように、「いでてゆく」歌を評して「…こきあぢはひ、えしもいでこじ」すなわち、「(注意してよまなければ、)深い面白みは感得できないだろう」と記されていると考えることは十分に可能であろうし、学習院大学蔵本をはじめとする諸本に見える、「はらにあぢはひて」といった本文よりも、より古形をとどめたものではなかったかと考えられるのである。

四、誤写の可能性

ここまでの検討から、学習院大学蔵本をはじめ、多くの諸本に見られる「腹に味はひて」といった本文は、平安時代の和文としては認めにくく、元来大島本などのように、「濃き味はひ…」といった形であったものが転訛した可能性が濃厚となった。本節では、本文転訛の具体的なプロセスを考察したい。まず、「こき」が「らに」に誤られたという点については、

「こ(己)き(支)」→「ら(良)に(尓)」

という過程が想定できよう。「こ(己)」から「ら(良)」に誤られた実例として、『蜻蛉日記』に以下のようなケースがある。

○　ひさかたのそらにこゝろの出づといへばかげはそらにもとまるべきかな
(天徳元年八月)

この歌は、作者が兼家を月に寓し「いかゞせん山のはにだにとゞまらでこゝろもそらにいでむ月をば」と詠んだのに対し、兼家が応じたものである。書陵部本では四句目に「そらにも」とあるが、ここは、「そこにも」の本文であるのが正しく、「あなたは私の心がうわの空だというので、月影が底(水底)に宿る、ではないが、私の姿は其処(あなたの所)にとどまるに違いないよ」と解さなければならない。上句に「ひさかたのそら」とあり、それに引かれてしまった誤りであると考えて相違ないだろうが、「こ(己)」と「ら(良)」との字形の相似をよく示すものであるといえる。

次に、「き(支)」が「に(尓)」に誤られたケースとして、同じく『蜻蛉日記』から実例を挙げる。

○　「いづら、ここに、人々、今年だに、いかで、ことといみなどして、世の中こころみむ」といふを聞きて、はらからとおぼしき人、まだ臥しながら、物にこゆ。　(安和二年一月)

安和二年の元旦、作者が「今年だけでもぜひ言忌をして、運試しをしてみましょう」と言ったので、妹にあたる人が、横になったまま、お祈り申し上げるという場面。書陵部本では「物にこゆ」となっているが、「物きこゆ」でなければ意味が通らない。

ここまで、「こ（己）」と「ら（良）」、「き（支）」と「に（尓）」が誤写されるケースを確認した。両者ともこれ以外にも多くの箇所で誤写が認められ、『伊勢物語』の当該本文についても、「…詠まずは、こき味はひ…」とあったものが、転写される過程で「…詠ます、はらに味はひて」へと転訛することは、十分に想定し得るものである。

次に問題となるのは、大島本及び日大為相本では「…濃き味はひ、えしもいでこじ」とあるのに対して、多くの諸本は「腹に味はひて」という形で段を終止させていることについてどう考えるかである。これについては、

①まず「こき」が「らに」に誤写され、その後「えしもいでこじ」が「て」となった。
②まず「えしもいでこじ」が「て」となり、その後「こき」が「らに」に誤写された。

という二通りの可能性が想定できるが、さきほどの分類でD―2とした伝為兼筆本に、

・はこきあぢはひて（らに）

とあったことに注目すると、これは当該本文が②のプロセスで転訛したことを示す、いわば過渡的な本文と言えるのではなかろうか。すなわち、元来「…濃き味はひ、えしもいでこじ」とあったものの、まず「えしもいでこじ」が「て」となり、書写のある段階で「こき」が「らに」に転訛した伝本が生まれ、その後「こき」という本文を留めていたこの本に「らに」の傍記がなされたものと考えることできるのである。なお、「えしもいでこじ」が「て」となったということに関しては、「え（衣）」と「て（天）」との字形相似によって「てしもいでこじ」となり、読解不能となった「しもいでこじ」の部分が落ちた、などといった過程が想定される。

以上、②に示した過程で本文が転訛し、現在見られるような「腹に味はひて」のごとき本文となったものと見ておきたい。

五、段末本文の解釈

ここで改めて、四十四段の段末本文の解釈を検討したい。はじめに、「あるがなかに…」という語構成について考える。これを現代語訳すると、「そこにあるものの中でも（特に）…」となり、中古の散文作品中には、以下のような用例がある。

○ あて宮は、御年十二と申しける如月に、御裳たてまつる、ほどもなく大人に

なり出でたまふ。あるが中にかたち清らに、御心ううらうじく、今めきたる御心にあり、ものの心も思し知りたれば、…　（うつほ物語・藤原の君）

この例では、あて宮について、「姫君たちの中で特に容貌が美しく、お心は洗練されており、…」と描写されている。『伊勢物語』四十四段の当該本文も同様に「（そこにある）歌の中でも特に趣があるので」と解釈することができるが、ここでは、いかなる集合を指して「あるがなか」と言っているのかが問題となる。これに関しては夙に、

・そのとき此哥の外に哥ども有べければ、「有が中に」といふなるべし。（『勢語臆断』）

とされているのをはじめ、最新の注釈書である片桐『全読解』でも「この歌はこの送別の宴で詠まれた歌の中で最高に趣があった」とされるなど、「この送別の宴で詠まれた歌の中で」と理解している注釈書が多いようである。ところが、江戸時代の複数の注釈書に、以下のごとき指摘があり、注意される。

・師　業平の哥おほき中にわきて面白ければ随分にこゝろをとゞめて女によませたりと也　（『伊勢物語拾穂抄』師説）

・又ある人は、此時の哥あまた有べければ、「あるが中に」と云なるべしといへり。されど本文にようばさもいはめ、こは評語なればすべてにかゝるべし。たゞ一首出してしか云べきことわりなし。此或人も此文の意を得ず。実に面白しといふとおもへる故に、すべてにかけん事はいかにとおもへる成べし。こはさま〴〵の心ふくめてわろき哥なるをかくいひてわらはしむる物也　（『伊勢物語古意』頭注）

右に挙げた二つの注釈書では、「あるがなかに」を、「送別の宴で詠まれた歌の中で」ではなく、「業平の歌の中で」ないし「すべて（『伊勢物語』全歌の意か）の中で」と理解しており、結論から言えば、この両注釈書の解釈が正解に近いものと考えられる。

この根拠として、段末本文以前に、この送別の宴で「いでてゆく…」以外の歌が詠まれている記述が無いことが挙げられる。『伊勢物語』において、宴席などの場で複数人が歌を詠んでいると思われる場合、

○　…むかしつかうまつりし人、ぞくなる・ぜんじなる、あまたまいりあつまりて、…みな人ゑひて、雪にふりこめられたりといふをだいにて、うたありけり。　（八十五段）

○　…あやしきふぢの花ありけり。…それをだいにてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじゝたまふときゝてきたりければ、とらへてよませける、…

（百一段）

などのように、それが明示されるのが通常であり、四十四段で催された宴席ではそれが示されていない以上、複数人によって和歌が詠まれたという前提に立つ必要はない。むしろこの送別の宴は、親しい者同士の、きわめて私的なものであり、当然その場で詠まれた歌も「いでてゆく」の一首のみであったと考えるのが自然であろう。

なお、当該章段の歌は勅撰集に見えず、業平の実作歌と認めることは難しい。よって、『拾穂抄』の師説のように「業平の哥おほき中に」とはせずに、『伊勢物語』に収載された歌の中で」と解釈するのが適切である。むろん、『伊勢物語』収載歌は全て業平の歌であるという建前で書かれた評言であると考えれば「業平の歌の中で」と解することは可能であるが、この場合は、結果的に『伊勢物語』作中歌の中で」という解釈と同義になるだろう。

六、おわりに

本節では、学習院大学蔵本『伊勢物語』四十四段の段末に存する「このうたは、あるがなかにおもしろければ、心とゞめてよます。はらにあぢはひて」という本文について検討し、大島本などの有する本文を手がかりに、学習院大学蔵本など大多数の伝本が有する本文は誤写により読解不能となってしまったものであると考え、「…よまずは、こきあぢはひ、えしもいでこじ」といった形をより古い本文として想定するべきことを示した。また、当該本文における「あるがなかに」は、「この宴席で詠まれた歌の中で」ではなく、『伊勢物語』収載歌の中で」と解するのが妥当であることも述べた。

本節における考察を反映させた形で、最後に、大島本に拠って『伊勢物語』四十四段の本文を見てみたい。

むかし、あがたへゆく人に、むまのはなむけせんとて、よびて、うとき人にしあらざりければ、いゑとうじにてさかづきさゝせて、をんなさうざくかづけんとす。あるじのをとこ、うたよみて、裳のこしにゆいつけさす。

いでゝゆく君をいはふとぬぎつればわれさへもなくなりぬべきかな

このうたは、あるがなかにおもしろければ、心とめてよまずは、こきあぢはひ、えしもいでこじ。

友人が地方へ赴任するのに際し、男は送別の宴を催し、前途を寿ぐ歌を詠みおくったのであった。また段末には、この歌は『伊勢物語』に収載された歌の中でもとりわけ趣のあるものであるから、心をとめてよまなければ、深い面白みは、決して感得できないだろう、とも評されているのである。

ここで、冒頭に示した学習院大学蔵本の本文と右の大島本の本文とを対照させてみると、

両者には随所に異同があることに気づく。例えば、和歌の二句目が学習院大学蔵本では「君がためにと」となっているのに対し、大島本では「君をいはふと」となっているほか、学習院大学蔵本では「いゑとうじ、さかづきさゝせて」となっている部分が、大島本では「いゑとうじにてさかづきさゝせて」となっているなどである。

『伊勢物語』は現在学習院大学蔵本を主として読まれているが、本節で見てきたように、大島本に限っても、学習院大学蔵本に見られないような異文が相応に存するのである。大島本をはじめとする非定家本の諸本にも目を配り、そこに何が書かれているのか、精緻な読解を行なうことが急務であると言える。また、そうした作業の蓄積が、総体としての『伊勢物語』の理解にも繋がっていくだろう。

一 傍注を私にまとめた。

二 例えば、九段の末尾に、「宮こ人いかゞとゝはゞみねたかみはれぬ雲ゐにわぶとこたへよ」という和歌を有する点などが挙げられる。この和歌を有するのは、他には伝民部卿局筆本などごく少数の伝本のみである。この伝本に関しては、古典文庫本の解説に詳しい。

三 いわゆる広本第二類でこのような本文となっていることに関しては、第二章で詳述する。

四 桜楓社、一九七七年。

五 黒川本『色葉字類抄』は、『色葉字類抄　研究並びに総合索引』（風間書房、一九六四年）に拠る。【　】内は三行割書であることを示す。観智院本『類聚名義抄』は、『類聚名義抄』（風間書房、一九五四年）に拠る。

六 本節で取り上げた平安時代の文献の引用は、それぞれ以下に拠る。、『うつほ物語』…中野幸一『新編日本古典文学全集　うつほ物語①』（小学館、一九九九年）、『蜻蛉日記』…上村悦子『蜻蛉日記　校本・書入・諸本の研究』（古典文庫、一九六三年）、『三宝絵』…馬淵和夫・小泉弘校注『新日本古典文学大系　三宝絵』（岩波書店、一九九七年）、『源氏物語』…『大島本　源氏物語』（角川書店、一九九六年）、『浜松中納言物語』…遠藤嘉基・松尾聰校注『日本古典文学大系　浜松中納言物語』（岩波書店、一九六四年）、『大鏡』…石川徹校注『新潮日本古典集成　大鏡』（新潮社、一九八九年）。

七 『源氏物語』諸注においては、玉上琢彌『源氏物語評釈　第三巻』（角川書店、一九七〇年）をはじめ、ほぼ全てのもので「食物」ないし「食物の味」として解釈されている。一方、辞書類では、『角川古語大辞典』、『古語大辞典』（小学館）、『古語大鑑』など、多くのもので「物事の趣」や「おもしろみ」といった項に分類されている。

八 本文および訓は、春日政治『西大寺本金光明最勝王経の國語學的研究』（勉誠社、一九八五年）に拠った。

九 『史記』および『荘子』の本文および書き下し文は、『新釈漢文大系』に拠った。

一〇 『高山寺古訓点史料　第一』（東京大学出版会、一九八〇年）に拠った。

第二章　広本系諸本の本文

第一節　大島本と阿波国文庫本

一、はじめに

『伊勢物語』の伝本は、定家本を中心とする百二十五段本を基準に、それより章段数の多いものを広本、少ないものを略本という。広本に属する諸本は、奥書・本文・章段の出入り・段序等種々の要素により、さらに細分化される。参考に、福井貞助『伊勢物語生成論』に掲出された分類を示す。

- 広本…
  - 第一類
    - ・大島雅太郎旧蔵伝為氏筆本(大島本)
    - ・日本大学総合図書館蔵伝為相筆本（日大為相本）
  - 第二類
    - ・阿波国文庫旧蔵本(阿波国文庫本)
    - ・谷森善臣旧蔵本(谷森本)
    - ・神宮文庫本　・日大本
  - 第三類　・泉州本

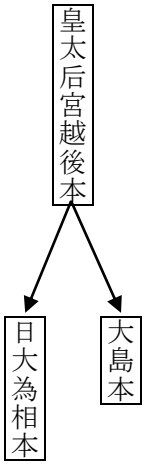
これらのうち、第二類は阿波国文庫本が（欠損・脱文等がいちばん少ないという意味で）最善本とされ、本文にはほとんど異同が無い。これに対して、第一類は大島本・日大為相本ともに類似した奥書を持ち、特に大島本は顕昭の手を経た伝本であることが確実視されてはいるものの、両本の関係についてはなお問題が存する。

広本内部での先後関係や生成過程を議論する際、大きな拠り所となっているのが、第一類の両本に存する奥書である。特に大島本の持つそれは長大かつ難解であり、後に挙げる久保木論文でも取り上げられているように、その読解が『伊勢物語』広本の系統論に直結しているといっても過言ではない。

広本第二類の中でも、特に阿波国文庫本が優れていることを明らかにしたのは、鈴木知太郎であった[一]。その後、片桐洋一『伊勢物語の研究　研究篇』[二]が定家本との本文異同を取り上げ、その性格の違いを述べている。しかるに、第一類の本をも視野に入れた、広本内部での阿波国文庫本の性格を研究した論は少ない。こうした研究には、まず福井貞助『伊勢物語生成論』[三]があり、福井は、本文よりもその章段排列を重視して諸本を整理し、第一類が第二類より古い部分があることを指摘している。また、柳田忠則『伊勢物語異本に関する研究』[四]も第一類が第二類に先立つことを主張しているが、定家本がそれらよりも古い形であるという前提に立脚して論じられており、この前提から見直す必要があるほか、全体を通して印象論的な本文批判に終始しているように感じられる。

こうした中で、近年、久保木秀夫により瞠目すべき見解が示された。①『伊勢物語』大

島本奥書再読」および、②「『伊勢物語』皇太后宮越後本の性格」がそれである[五]。久保木①論文では、大島本の奥書の精緻な読解が試みられており、第一類の両本の奥書にその名が見える「皇太后宮越後本」という（今は散佚した）伝本をも視野に入れた上で、ごく簡単に、



という図で三本の関係を示している。また、大島本の奥書には、

・以顕照・阿闍梨并皇太后宮越後本所書写云々

とあり、これに従えば大島本は顕昭本による校合を経た本文であることも言えるので、本文としては、

といった過程を想定していると言ってよい。

そして②論文ではさらに奥書の読解を進め、同じく大島本・日大為相本にその名が見える「顕輔卿本」が皇太后宮越後本の親本であったと断じ、その顕輔卿本は、阿波国文庫本にもとづき改変され、越後本のような形になったと推定している。

要するに、久保木②論文に拠れば、大島本・日大為相本の前段階には、阿波国文庫本が既に存在している、ということになり、従来の研究とは反対の結論に到っているのである。

本節では、結論としては従来の研究と同様、「大島本（・日大為相本）→阿波国文庫本」という線で考えるのが妥当であることを述べるが、今一度、大島本と阿波国文庫本とを中心に本文の比較を行ない、必要に応じて日大為相本や定家本なども参照しつつ、旧来の論を一歩進め、より客観的にその根拠を示す。

二、傍記の本文化

『伊勢物語』九十五段は、比較的諸本に異同が少ない章段である。まずは大島本と阿波国文庫本とで本文を見てみたい。

〈大島本〉

むかし、二條のきさきにつかうまつるをとこありけり。女のつかうまつりけるをつね

にみかはして、うたてよばひわたりけり。いかで物ごしにたいめして、おぼつかなう思ひつめたる事、すこしはるかさむ、といひければ、女、いとしのびて、物ごしにあひにけり。物がたりなどして、をとこ、

ひこぼしにあひはまさぬあまのがはへだつるせきをいまはやめてよ

このうたにめでゝ、あひにけり。

〈阿波国文庫本〉

むかし、二条のきさきにつかうまつるおとこありけり。をんなのつかうまつるをつねにみかはして、よばひわたりけり。いかでものごしにたいめむして、おぼつかなう思つめたること、すこしはるかさむ、といひければ、をんな、いとしのびて、ものごしに七月七日あひにけり。ものがたりなどして、おとこ、

ひこぼしにこひはまさりぬあまのがはへだつるせきをいまはやみてよ

このうたにめでゝ、あひにけり。

点線部分にも小異が見られるものの、最も大きな違いは阿波国文庫本の二重傍線部である。これに拠れば男が和歌を詠み、女と逢ったタイミングがよく分かるが、『伊勢物語』の諸本のうち、このような本文を持つのは広本第二類と、第三類の泉州本のみである。元来阿波国文庫本のような形であり、他の諸本では日時を示す本文が脱落した、と無理に考えるよりも、阿波国文庫本では、和歌の内容に拠って、傍らに「七月七日」と記されていたものが本文化してしまった、とするのが妥当である。この部分に関して阿波国文庫本の本文は新しいものとおぼしい、ということを確認しておきたい。

ところで、『伊勢物語』の本文のうち、段末に記される注記的な本文―就中、人名を明らかにするもの―は特に異文が発生しやすい。書写者がどのようにこの物語を享受していたのかがよく分かる、まことに興味深い部分である。

『伊勢物語』百段は、男が、或る高貴な女性と忘れ草にちなんだ応酬をする。直前の九十九段と併せて『大和物語』の在中将章段に採られていることからも、二条后とのエピソードとして享受する立場が古来根強かった章段であると考えられる。

〈大島本〉

むかし、おとこ、こうらう殿のはさまをわたりければ、あるやうごとなき人の御つぼねより、わすれぐさを、しのぶぐさとやいふ、とていださせ給へりければ、給はりて

二条后とぞ

わすれぐさをふるのべとはみるらめどこはしのぶなりのちもたのまむ

〈阿波国文庫本〉

むかし、おとこ、後涼殿のはさまをわたりければ、あるやむごとなき御つぼねより、わすれぐさを、しのぶぐさとやいふ、とていださせ給ければ、たまはりて、

わすれぐさおふるのべとはみゆらめどこはしのぶ也のちもたのまん
二条のきさきとぞ。

両本の二重傍線部では、この女性が二条后である、としている。大島本では、和歌の直前に細字で「二条后とぞ」と書き入れてあるが、阿波国文庫本では段末に「二条のきさきとぞ」という本文がある。これは大島本のような形の書き入れが阿波国文庫本の段階では本文化してしまったものである、と考えるしかなく、その逆は考えにくいであろう。両本を見ると、『伊勢物語』段末の注記的本文の発生するプロセスが見て取れて面白い。当該箇所に関して、阿波国文庫本の祖本は、大島本のような形であったものと考えて相違無いのではないだろうか。

こうした現象を踏まえて、六段の注記的本文を対校形式で見てみよう。作中に登場する「鬼」が、二条后を取り戻しに来た彼女の兄弟たちであった、とする箇所である。参考のために天福本・日大為相本をも掲出する。

大　御・・せうとほりかはの大将・太郎・もとつねのをとゞ・くにつねの大納言
相　御・・せうとほりかはの大将・たらう基・経・・・・・国・経・の大納言
阿　おほむせうとほりかは・大将・たらうもとつねのおとうとくにつねの大納言
天　御・・せうとほりかはのおとゞたらう・・・・・・・・くにつねの大納言

これらのうち、天福本の形は「御兄である、堀川の大臣や長男の国経の大納言」と読め、最も分かりやすい。しかし、広本系統の三本では、堀川の「大臣」ではなく「大将」となっている上、彼の名である「基経」が本文に入っており、文意が通らなくなっている。広本系統の本では元来、

・御兄、堀川（基経の大臣）の大将・太郎国経の大納言

などという形で傍記があり、これが本文に紛れこんでしまったものであると考えられるのではないだろうか。日大為相本では、「大臣」の要素が無いため、大島本や阿波国文庫本とは若干異なる形になっているが、大島本と阿波国文庫本とを比べると、阿波国文庫本では、「もとつねのをとゞ」ではなく「もとつねのおとうと」となっている点が注意される。阿波国文庫本は、「をとゞ」を「大臣」ではなく「兄・弟」の「弟」であると判断し、このように記したものと考えられるのではなかろうか。「太郎」であるのは国経であり、「基経の弟、国経の大納言」とする阿波国文庫本の本文は、史実の面からも、また文意の面からも理解不能である。このあたり、二条后のきょうだい関係を記す文脈である上、大島本の形では文意が不明瞭であるので、阿波国文庫本の如き誤りを惹起したのではないかと思われる。たった一文字の衍字ではあるが、これまでのケースを見る限り、この部分においても、

阿波国文庫本は大島本にもとづいており、大島本からさらに転訛した本文を有していることが言えるのではなかろうか。少なくとも、「阿波国文庫本→日大為相本（＝越後本）→大島本」という過程を想定することは難しいように見える。

三、本文転訛・本文混成

『伊勢物語』屈指の難解箇所として、第一章第二節で取り上げた四十四段の段末本文が挙げられる。地方へ赴任する親友に対し、男が前途を寿ぐ和歌を詠み贈る、という章段であるが、定家本末尾に以下の如き本文がある。

○　このうたはあるがなかにおもしろければ、心とゞめてよます。はらにあぢはひて。

傍線を付した箇所に関して、諸注様々な解釈を試みているが、この箇所は定家本に拠る限り正しい解釈は難しい。大島本・日大為相本を参照すると、

○　このうたはあるがなかにおもしろければ、心とめてよまずは、こきあぢはひえしもいでこじ。

となっている。こちらがより古い形であり、定家本などの本文は、「こ（己）き（支）」と「ら（良）に（尓）」の字形相似に起因する誤写であったと断じてよい。大島本などの形にもとづき、

この歌は、『伊勢物語』の歌の中でも特に趣あるものなので、注意してよまなければ、深い味わいは決して感得できないだろう。

と解釈するのが正しい。

ここで、阿波国文庫本の本文を見ると、

○　このうたは、あるがなかにおもしろければ、こゝろとゞめてよます。

となっており、末尾の「濃き味はひ…」ないし「腹に味はひて」といった箇所を持たない形になっている。他本に存する末尾の本文が難解で削除したものと考えられるが、このような切り方をするためには、「…よまずは、こきあぢはひ…」という大島本や日大為相本ではなく、「…よます。腹に味はひて」となっている定家本のような本文に依拠したものと見なければならない。

こうして見ると、この本文に関しては、

大島本・日大為相本→定家本等→阿波国文庫本

という過程が想定され、やはり阿波国文庫本の本文は新しいものであると考えるのが妥当である。

ここで問題となるのは、さきに見た百段のケースでは、阿波国文庫本の本文は大島本の書入にもとづいていると考えられたのに対して、今検討した四十四段の場合、阿波国文庫本はむしろ大島本以外の本に拠って本文に手を入れていると考えなければならない点である。

以上の点については、六十三段の本文から考えてみたい。まずは天福本で問題箇所の前後の文脈を確認する。

さてのちおとこ見えざりければ、女、おとこの家にいきてかいまみけるを、おとこ、ほのかに見て、

もゝとせにひとゝせたらぬつくもがみ我をこふらしおもかげに見ゆ

とて、いでたつけしきを見て、むばらからたちにかゝりていへにきてうちふせり。

好色な女が、在五中将と一夜を共にするものの、彼がその後一切訪れなくなってしまったので、その家に様子を見に行く。すると、在五中将が「百年に…」の歌を詠み、老女の家に行こうとする様子を見せたので「むばらからたち」に引っ掛かりながら、慌てて帰宅する場面である。傍線部の本文を対校してみると、以下のようになる。

大　とてむまにくらをく・・・・・・けしきをみて
阿　とてむまにくらをかせていでたつけしきをみて
天　とて・・・・・・・・・いでたつけしきを見て

天福本では、「いでたつけしき」とあるのに対し、大島本は、「むまにくらをくけしき」とあり、阿波国文庫本では、「むまにくらをかせていでたつけしき」となっている。これに関しては、阿波国文庫本が大島本と天福本のような本文を混成したと考えてよいのではないだろうか。阿波国文庫本では「…をかせて」と、大島本には無い使役の要素を持っている点はやや気になるが、少なくとも、「阿波国文庫本→大島本」と考えては、大島本が「いでたつ」を削除し、天福本とで異なる要素をたまたま分かち伝えたこととなってしまう。このような可能性を考えるよりも、素直に、阿波国文庫本が複数の本を校合して本文を混成した痕跡であると考えた方がよいように思われる。

こうして見てくると、阿波国文庫本は、大島本はもとより、その他の―例えば天福本のような―本文をも校合し、ケースバイケースでその本文を取捨選択または混成していたと考えることが可能なのであり、百段の「二条のきさきとぞ」は大島本をもとに本文化したもので、一方四十四段においては、「濃き味はひ」「腹に味はひて」の対立本文を処理でき

ず、天福本のような形をベースに「…よます」と文を切断したと推定できるのではないだろうか。

四、久保木論再考―段序の問題を中心に―

ここまで、大島本と阿波国文庫本における校合作業をもとに、阿波国文庫本には新しい本文が見られ、特に「大島本→阿波国文庫本」という過程を想定しなければならない箇所も複数あることを示した。

本節では、久保木論がその根拠とする事柄のうち、広本の第一類と第二類との、章段排列の問題を扱いたい。ただし、第一類のうち日大為相本は末尾に大きな欠脱を抱えているので、当面は大島本と阿波国文庫本との比較となる。

はじめに、大島本の本体部分の段序は、定家本の番号を基準にすると、以下のようになっている。

1～71・73～75・72・76～81・A・82～87・89～101・106～108・102～105・109～113・118・119・88・120～124・114・125

次に、阿波国文庫本の（「つひにゆく」歌の段までの）段序を以下に示す。

1～71・73～75・72・76～81・A・82～87・89～101・106～108・102～105・109～113・88・120～125

大島本の方で傍線を付した三つの章段は、阿波国文庫本には存在しない。これらのうち、118と119には「或本有之」「或本在之」という注記が付されており、確かにこの両段に関しては大島本が阿波国文庫本を元としており、後補したと考えることも可能ではある。一方で、114に関しては大島本の注記に、

①この物語不可入申故は業平死語事歟
②此歌不入本もあり

と記されており、久保木は114に関しても右の注記を元にして、「いずれかの段階で後補された」章段だと考えているが、119に付されたの②の記述は、「親本にはこの段は存在したが、校合のために披見した本の中にはこの歌を含まないものもあった」と読み取るのが素直であり、もし大島本の親本が阿波国文庫本であり、そこに存在しない章段であったことを記すのであれば、「不入本もあり」ではなく、前記両段と同様に「或本有之」とでもしたのではなかったのではないだろうか。ここは逆に、大島本にもとづいて成立した阿波国文

庫本が、大島本の注記①などを参考にして、この段を削除した、と考えるのが妥当であるように見える。〈『伊勢物語』＝業平の一代記〉とする立場の書写者であるならば、大島本の注記①に書かれていることを重視して、この段を削除することは十分に考えられるし、実際、さきに見た百段に「二条のきさきとぞ」という本文を有している阿波国文庫本であってみれば、『伊勢物語』が業平の行状を辿った実話であると考えて、114を夾雑物として削除した可能性は大いにあると考えられる。また、さきに取り上げた118・119も、

A両段の無い大島本→阿波国文庫本の成立→大島本に両段が「或本有之」という注記とともに付載

B両段を含んだ大島本→阿波国文庫本成立時に、親本に存在しない段として掲載せず

といういずれかのプロセスを考えれば「大島本→阿波国文庫本」という成立過程からでも説明が可能である。もっとも、百段の「二条后とぞ」のケースをはじめとして、阿波国文庫本は注記がある状態の大島本にもとづいているらしいので、大島本の「二条后とぞ」という注記などと「或本有之」「或本在之」という注記の記者が同一であると考えるならば、**B**の立場をとっておくのが穏当であろうか。

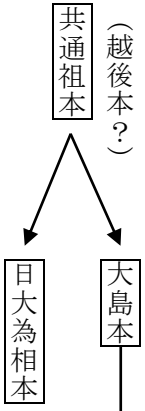
もう一点注意すべきなのは、破線で示した71～76の排列である。これらの章段は日大為相本にも見えるものなので、日大為相本の排列を参照すると、

71～76

という、定家本と全く同じ排列となっている。久保木論に拠るならば、大島本と日大為相本とは皇太后宮越後本という共通祖本から発し、またその越後本の章段排列は阿波国文庫本にもとづいているはずだから、問題となる。これに関して久保木は、

> これについては、越後本の章段配列改変時における単なる見落とし、とでも言えればよいのだが、そうでなければ、…（中略）…阿波国文庫本と少しだけ異なる章段配列の本文がかつては世上に存在していた、と認めなければならないだろう。

と述べるのだが、このような想定をしなくとも、



などといったように、「大島本→阿波国文庫本」の線で考えれば、この両本が共通の章段排列になっていることは当然であり、日大為相本は定家本（など）との接触により、さきに

見た排列となっていると考えればよいはずである。

五、おわりに

本節では、『伊勢物語』広本を論じた近年の研究のうち、最も説得力があると言ってよい久保木秀夫の論考が想定する「阿波国文庫本→（越後本・）日大為相本→大島本」という過程について、これが成り立たないことを検証した。少なくとも、百段や六十三段に関しては、阿波国文庫本は大島本（に類する本）に拠っていると考えてよいのではないだろうか。

仮に本節で指摘したことと久保木の議論とを整合させるならば、

〈原・阿波国文庫本〉→大島本・日大為相本

という過程を想定した上で、〈原・阿波国文庫本〉にもとづいて大島本・日大為相本などの本文が成立した後、〈原・阿波国文庫本〉の本文に今回指摘したような改変が施され、現在見られるような阿波国文庫本をはじめとする第二類の形となった、と考えることも不可能ではないが、素直に大島本・日大為相本が阿波国文庫本よりも古い本文を留めていると考えた方が遥かに合理的だと思う。

畢竟、従来指摘されてきた通り、阿波国文庫本よりも大島本の方がより古いという結論に落ち着いたのだが、これまでの研究でなされてきた本文批判は印象的・恣意的なものが多いことは否めず、より客観的・合理的に判断できる要素からこれを再検証したつもりである。『伊勢物語』に限らず、或る作品の或る箇所に本文の対立が認められる場合、その先後関係を断定するのは極めて難しい。しかるに、本節で用いた傍記の本文化・誤写・本文混成の痕跡（あるいは、久保木の用いた奥書の読解という視点）などは、これを見抜く証拠たり得るものであると考える。今後の『伊勢物語』諸本研究は、広本にとどまらず、こうした方法によって再検討される必要があるだろう。

一　「宮内庁書陵部蔵阿波国文庫旧蔵　神宮文庫本系統伊勢物語について」（「武蔵野文学」七、一九六〇年十二月）

二　明治書院、一九六八年。

三　有精堂、一九六五年。

四　桜楓社、一九八三年。

五　①は、谷知子・田渕句美子共編『平安文学をいかに読み直すか』（笠間書院、二〇一二年）所収。②は、「国語国文」八十二巻九号、二〇一三年九月。

第二節　大島本と日大為相本・泉州本

一、はじめに

『伊勢物語』の広本の先後関係について、前節では大島本と阿波国文庫本との比較を軸にして論じた。本節では、これに日大為相本・泉州本をも含めて考えていきたい。

大島本と日大為相本との関係については、両者の有する奥書からのアプローチがこれまで主になされており、最新の論考である久保木秀夫の「『伊勢物語』大島本奥書再読」も、日大為相本の奥書の読解を端緒として大島本や日大為相本の奥書に名称のみが見える散逸本（皇太后宮越後本など）についてまで考究したものであるが、内田美由紀が、

…久保木氏自身、

ただ、日大為相本の本文等から帰納するに、日大為相本は「皇太后宮越後本」を頗る忠実に伝えているのではなさそうで、おそらくはいずれかの段階で、奥書の配置その他の改変があったと考えざるを得ない。

と述べておられる。日大為相本（一誠堂旧蔵伝為相筆本）には、奥書の配置そのものに疑問や問題があるのであるから、その奥書をもってその写本本文を皇太后宮越後本のものと判断することは無理ではなかろうか。

と指摘する一通り、なお問題の多いと思われる奥書の記述から演繹的に伝本の性格を考えるよりも、まずは本文を精査して、各伝本の性格を考察するのが適切であると思われる。

内田は右の観点から、大島本の本体部分の本文を定家本と対校し、大島本について、「誤写が多いと言われているが、必ずしもそうとばかりも言い難い例がある」と指摘する。そうした手続きじたいは賛同されるべきものではあるが、内田の本文の処理には従い難い点もある。例えば、『伊勢物語』中でも最も長大な本文を有する六十五段の、「在原なりける男」が、御手洗川で禊をする場面について、定家本で、「…おむやうじかむなぎよびて」とある箇所が、大島本で、「かひなき陰陽師」となっていることについて、

「仏神に申しけれど、いやまさりに恋しくのみおぼえければ甲斐なき。陰陽師呼びて恋せじといふ祓えの具してなん行きける」となって、…

と述べ、大島本の本文の方が「簡潔かつ論理的」であると評しているが、「甲斐なき。」と文を切断するのはいかがであろうか。「かひなき」は連体形であり、大島本で読む限り、陰陽師を修飾する言辞であるとしかみなされない。ここは定家本のような本文が正しく、大島本が「かむなぎ」を「かひなき」と見誤って、「陰陽師」の前に移動させた、と見るのが妥当であろう。

以下、本節では、前節と同様、本文やそれに付随する勘物・書入を調査した結果から広本系伝本の関係を帰納的に考察していきたいと考える。

二、異本A段の混入

『伊勢物語』の章段は、定家本の章段排列を基準として、初（一）～百二十五段までの序数で記される。それに加えて、定家本には無い章段は大津有一『伊勢物語に就きての研究　補遺篇　索引篇　図録篇』[三]のアルファベットで示すのが通例となっている。このいわゆる異本章段群のうち、広本系諸本の先後関係を考えるにあたり、A段について考えたい。

はじめに、阿波国文庫本を底本としてこの章段を掲出している、福井『新全集』の本文に拠りつつ、その内容を確認する。なお、句読点は私に改めた。

雨のいみじうふり暮して、つとめてもなほいみじうふるに、ある人のがりやりし、
　ふりくらしふりくらしつる雨の音をつれなき人の心ともがな
返し、
　ややもせば風にしたがふ雨の音をたえぬ心にかけずもあらなむ

このように一対の贈答から成る、ごく短い掌編なのだが、まずは一点、注釈上の問題を処理しておこう。福井『新全集』は一首目の「つれなき人」について、「…無情冷淡な人。相手の女をさす。」としており、一首目を男の、二首目を女の詠として理解しているようだが、これは誤りである。木戸久二子や片桐『全読解』が指摘する通り[四]、和歌の詠まれ方として、一首目を女の、二首目を男の詠と考えるべきであろう。

この章段は、定家本でいう八十一段と八十二段との間に存在する。広本系統に見られるいわゆる異本章段のうち、男の臨終を描く百二十五段以前に見られるものはこの段のみであり、百二十五段の後に存在する他の異本章段群とは性質の異なるものであると言える。また、直接経験を表す過去の助動詞「き」の連体形の「し」が用いられている点、「むかし」という書き出しではない点なども注意されるところである。これらのことを踏まえて、大島本における当該章段を見てみたい。丁数や改行位置など、原本の書式を明示する。

七八丁・裏・五行目　つかきにけんとはよめるあめの
六　いみしうふりくらしてつとめて
七　もなをいみしうふるにある人
八　のかりやりし
九　ふりくらし〳〵つるあめのをとを
七九・表・一　つれなき人の心ともがな
二　返し
三　やゝもすれは風にしたかふあめのをとを
四　たえぬ心にかけすもあらなん

大島本では、傍線部のように、この章段が改行されず、直前の八十一段「（しほがまにい）つかきにけんとはよめる」に続けてこの段が書き始められている。このように『伊勢物語』の章段が改行されず、前の段に続けて書き始められるのは異例である。柳田忠則はこの現象をもって、「為氏本はここにおいて見る限り原型から一歩離れていると思われる」[五]とするが、そうではなく、片桐『全読解』が、

この段が、第八十一段の文章に改行もせずに続けて書かれているというのは、明らかに混入であ

ることを思わせる。雨が続くつれづれの中で、『伊勢物語』を書写している女が、男の来訪を待ちつつ、こんな歌物語を紙の余白に書きつけたのではないかというような想像をしてみるのもおもしろいのではないか。勝手な想像ではあるが、「昔、男（ありけり）」から始まらないこと、「…けり」で語られるべき物語が「ある人のがりやりし」と書かれていることの理由を説明するための一つの仮説としては、このような見方もおもしろいのではないかと思うのである。

と述べるように、もともとは『伊勢物語』の一章段としての体裁をなしていなかったA段が、ある段階で本文に紛れ込み、一つの章段となってしまった、その過程を示す本文として、A段を有する諸本の中では古い形を留めているものと考えるべきであろう[六]。

以上のことから、まず、大島本に広本系諸本の中でも古態を認めることができそうである。

三、勘物や書入と本文

ここからは、大島本と日大為相本との関係について、写本に付せられた勘物や書入と本文との関わりから考えてみたい。

写本に付せられた勘物が、本文の内容に連動する、という現象が『伊勢物語』の写本には見受けられる場合がある。例えば、七十六段は、翁が往時を偲んで、二条の后に「大原や」の歌を詠みかける、といった内容を持つのだが、冒頭部分が定家本などでは、

○　むかし、二條の后の、まだ春宮のみやすん所と申ける時、…

となっているのに対して、大島本では、

抑今案、清和東宮年一践祚年九也
仍東宮御息所如何

○　むかし、二条のきさきの、まだみやすどころと申けるころ、…

のようになっており[七]、本文の傍らに勘づけられた記述と連動する形で、本文も「東宮の御息所」ではなくて「御息所」とされている。こうした現象はひとり大島本のこの部分のみに見られるものではなく、日大為相本にも見られるものである。以下、①では、こうした勘物と本文との連動といった観点から日大為相本の独自異文を取り上げ、②では、写本に存在する書入から、大島本と日大為相本との関係を考えていきたい。

①斎宮章段としての六十五段

『伊勢物語』の六十九段は、伊勢斎宮と男が逢瀬を交わすという内容の、本作品中でも最も著名な章段の一つである。この章段の序盤には、斎宮の母が、斎宮に対して、「常の使よりは、この人よくいたはれ」と言い送る場面がある。斎宮と男の逢瀬の、「伏線」とも言える描写であるが、このあたりの本文について、広本系諸本の本文を対照させてみたい。はじめに現在最も広く読まれえている定家天福二年本の本文をも掲出する。

○定家本（学習院大学蔵本）

かの伊勢の斎宮なりける人のおや、つねのつかひよりはこの人よくいたはれといひやれりければ、…

○大島本

かのいせの斎宮なりける人のをや、三条のまちこれたかのみこのはゝなり、つねのかひよりはこの人よくいたはれといひやれりければ、…

○日大為相本

かの伊勢の斎宮なりける人のをや、三条のまち、惟彦のみこのはゝなり、つねのつかひよりはこのよくいたはれといひやれりければ、…

○阿波国文庫本

かのいせの斎宮なりける人のみをや、三条のまち惟喬のみこなり、つねのつかひよりはこのたびよくいたはれといひやれりければ、…

各伝本に小異が見られるが、最も大きな違いは、広本系諸本には、定家本には無い、「斎宮なりける人の親」についての説明が見られることである。当該章段段末の注記的本文にあるように、斎宮は「文徳天皇のむすめ、惟喬親王の妹」なので、もちろん事実関係としては大島本のように、斎宮の親を「惟喬親王の母」とするのが適切であるのだが、日大為相本は、「惟彦親王の母」としている。日大為相本は、今参照した段末の注記的本文も、

斎宮は水尾の御時、文徳天皇の御むすめ、惟彦のみこの御いもうと。

となっており、これは一見、単なる誤りに見えるものであるが、日大為本の他の箇所に注目すると、そこに日大為相本独特の論理が見えてくる。

『伊勢物語』六十五段は、作中最も長大な本文を擁する章段である。この段の末尾には、登場人物の実名を明らかにする注記的本文が見られ、大島本・日大為相本にはそのさらに後に、人物関係を詳述した勘物が見られる。両本の記述を確認してみたい。

○大島本

大御息所は染殿后。いとこの御息所は二条后。染殿は良房女。二条后は長良女。然ば此女は二条后と思ふにもにず。昔の八古今には直子とあり。又在原なりけるおとことある業平が二条后に密通したる人也。業平せきをはれたる事あり。おほやうは業平と思べし。

或考物云、大御息所は染殿の后、此女は二条后云々。

私云、此女直子也。二条五条両后之姪如清和天皇之寵女。直子は因香内侍のむすめとあり。

○日大為相本

…大御息所は染殿后。いとこの御息所は二条の后。染殿は良房女。二条の后は長良女。しかればこの女は二条后と思ふに、「もにすむゝしの」、古今には直子とあり。また在原なりけるをとことあり。業平、二条后にひそかに通じたる人なり。おほやうは業平と思ふべし。

或考物云、大御息所は染殿后、此女は二条后云々。

私云、此女は惟彦親王御子直子也。二条五条両后の姪清和天皇之寵女也。

直子の因香内侍のむすめとあり。

大島本も日大為相本もほぼ同じ内容をともに有すると言えるが、傍線部の記述が、大島本には無い。為相本の傍線部の記述に見られる「惟彦親王」は、この写本において、先に見た六十九段にも見られる人物であった。六十九段の記述では斎宮が惟彦親王の妹とされ、六十五段では直子が惟彦親王の娘とされており、六十九段の斎宮と六十五段の直子を同一人物と考えた場合、この記述には矛盾が見られるのではあるが、「惟彦親王」やその「御子」である「直子」という人物じたいは実在しており、『尊卑分脈』などに拠れば、惟彦親王は文徳天皇の皇子で、元慶七年正月に薨去した人物である。直子女王は惟彦親王の娘で、女王として初めて斎院に卜定された人物だという。

こうした事実をもとにして考えた場合、日大為相本の勘物の記者は、斎院であった「直子女王」を六十五段の和歌を詠んだ人物と同一であると考えた上で、「斎院」と「斎宮」とを混同して、六十九段における「斎宮」はこの「直子女王」のことであるとしたのではないだろうか。このように日大為相本の勘物には、本文と連動する形で、『伊勢物語』をどう受容していたのか、その一端を窺うことのできる興味深い記述がある。ただし、もちろん六十五段で「直子」といえば、この段の「海人の刈る…」歌を詠んだ典侍藤原直子のことであり、直子女王とは別人であるので、日大為相本の勘物は事実誤認であるとしなければならない。六十九段に見られる「惟彦親王」の記述は、大島本に見られるような「三条のまちこれたかのみこのはゝなり」といった本文から派生したものと言えるだろう。

②書入と本文

『伊勢物語』七十八段は、安祥寺における法要の後、右大将藤原常行が山師の禅師の親王に趣きのある石を奉る際、右馬頭であった人が和歌を付けた、という内容のものである。その段末部分は、日大為相では以下のようになっている。

○　あかねどもいはにぞまがふいろみえぬこゝろをみえんよしのなければ
　となんよめりける。或本なし

この細字書入だけを見ると、この章段自体が「或本」には無かったか、あるいは最後の「となんよめりける」という言辞が「或本」には無かったか、いずれかであると考えることができるが、今一つよくわからない記述である。ここで、大島本の当該部分を見ると、

○　あかねどもいはにぞかふるいろみえぬ心をみせんよしのなければ
　となんよみける。（或本ニなし）むかしの人のこゝろざし、かやうになんありける。

となっている。この両者を比べると、日大為相本の書入がよく理解できるだろう。すなわち、大島本のように「昔の人の…」という本文に対して、「或本」との校合の結果、「或本ニなし」などといった書入が施され、それが日大為相本の段階で、「或本」に無いとされた「昔の人の…」という本文が削除されたが、書入自体は残ってしまった、と考えられるのではないだろうか。大島本、日大為相本の両本を見るに、日大為相本の本文に、「或本なし」といった細字書入が何故か書入れられ、それに辻褄を合わせるかのように、大島本の段階で「昔の人の」の異文が本文に足された、とするのは無理があろう。この点からも、大島本がより古い形を留めている、と言えるのではなかろうかと思う。

四、大島本と泉州本

ここまで論じて来なかった、泉州本に関しても考察を加えておこう。武田祐吉によって紹介されたこの本は、戦災によって焼失してしまったものであるが、翻刻本が備わるため、活字でその全容をひとまずは知ることができる[九]。その後、中田武司が定家本との校異を示し、その特徴が明らかとなったものである[一〇]。

はじめに、十五段の段末に付せられた本文を見てみたい。泉州本の本文を見る前に、大島本・日大為相本・学習院大学蔵本でその箇所を掲げる。

大　女・・かぎりなくめでたしと思・へどもさるさがなきえびすごゝろもちてはいかゞ・せん・
相　をんなかぎりなくめでたしとおもへどもさるさがなきえびす心・・・みてはいかゞはせん・
阿　をんなかぎりなくめでたしとおもひて・さるさがなきえびすごゝろもちてはいかゞはせん・
天　女・・かぎりなくめでたしとおもへど・さるさがなきえびすごゝろを見てはいかゞはせんは

ここで注目したいのは、傍線を付した部分である。「えびす心」を「見て」か「もちて」かで本文が対立しているが、これは、「を（遠）み（美）」と「も（毛）ち（知）」との字形相似に惹起された誤写であり、本来は、「…をみては」とあったものが、「…もちては」に転訛したのだと考えられる。これに加えて、泉州本の本文を参照すると、

○　女、かぎりなくめでたしとおもへど、さるさがなきえびすごゝろみてもちてはいかゞせん。

となっている。これは明らかに、「みて」の本文か「もちて」の本文かのどちらかの横に、もう一方の本文が異文注記の形で書かれていたものが、本文へと混入してしまったものと見ることができるのではないだろうか。また、百段の本文に関しても、前節で見た阿波国文庫本と全く同様で、大島本の、

むかし、おとこ、こうらう殿のはさまをわたりければ、あるやうごとなき人の御つぼねより、わすれぐさを、しのぶぐさとやいふ、とていださせ給へりければ、給はりて（条局とぞ）

わすれぐさをふるのべとはみるらめどこはしのぶなりのちもたのまむ

という記述に対して、泉州本は、

むかし、おとこ、後涼殿のはさまをわたりければ、あるやんごとなき人の御つぼねより、わすれ

ぐさを、しのぶぐさとやいふ、とていださせたまへりければ、たまはりて
わすれぐさおふる野べとはみるらめどこはしのぶなりのちもたのまむ
二條のきさいとぞ。

となっており、これは明らかに傍記が本文へと混入したものと考えられよう[二]。

以上の二点からは、泉州本の本文もやはり大島本のような本文から派生したと考えておくべきであろう。

五、大島本の表現世界

本節では、日大為相本や泉州本をも加えて、広本の生成について考えてきた。異本A段の混入の痕跡といった観点から見ると、広本としては大島本が古い形を留めており、大島本・日大為相本ともに有する勘物や書入の類を検討しても、大島本にその古さを認めるべきである。日大為相本と阿波国文庫本は、大島本のような本文に定家本のような本文を持つ伝本との接触があり、今見られるような形になった、と考えるのが最も適切であると考える。また、泉州本に関しても同断である。

『伊勢物語』の通行本的な地位を占めているのは学習院大学蔵本であり、この伝本についての読解が進められているが、これに対置させ得る本として、大島本に書かれている内容の検討が喫緊の課題であると言えるだろう。最後に、その一端を示しておきたい。

大島本は、定家本に比して、二条后や斎宮などに関わる章段の中で、女の側も男に心を開いていることが強調されている、という特徴がある。例えば、盗み出した「女」を鬼に喰われてしまい、男が「白玉か…」の歌を詠む、といった内容の六段では、定家本では、

○　女の、えうまじかりけるを、としをへてよばひわたりけるを、からうして、ぬすみいでゝ、いとくらきにきけり。

とあるが、大島本では、

○　女の、あふまじかりけるを、としをへてよばひわたりけるを、からうして、女、こゝろをあはせて、ぬすみいでゝ、いとくらきにきけり。

となっているほか、六十九段で斎宮と男が「君や来し…」「かきくらす…」の贈答を交わした後、国守が酒宴を催したためにもはや逢瀬がかなわなかった、という箇所の描写で、定家本が、

○　おとこも人しれずちのなみだをながせどえあはず。

となっているのに対して、大島本が、

○　おとこも女も人しれずちのなみだをながせどえあはず。

という本文を持っている。定家本においても、「男も」とあることにより女も血の涙を流していること

が分かるが、大島本ではそれが明確化されていると言えよう。また、六十九段の後日譚であることを匂わせる百四段においても、定家本では、

○　むかし、ことなることなくてあまになれる人有けり。かたちをやつしたれど、物やゆかしかりけむ、かものまつり見にいでたりけるを、おとこ、うたよみてやる、

　世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよともたのまるゝ哉

これは、斎宮の物見たまひけるくるまにかくきこえたりければ、見さしてかへり給にけりとなん。

とあり、かつての斎宮が男を拒んでいることが窺えるが、大島本において、男が歌を詠みかけた後、

○　よをうみのあまとし人をみるからにめくはせよともたのまるゝかな

かへし、いとおもしろくしてやらむとするに、物みやあはてけん、いはずなりにけり。これはさいぐうの物み給けるくるまに、かくきこえたりければ、みさしてかへり給けりとなん。

というように、斎宮が返歌を詠もうとした、という描写が見られる。「物みやあはてけん」は難解であるが、「～や…けん」の形の草紙地であることは間違いないので、物語の叙述じたいには大きく影響しないと考えられる。これを除いて考えれば、「斎宮が返歌を詠もうとしたが、結局詠まずじまいであった」という大意は動かない。これは大島本の独自異文であり、ここは、女が一方的に拒否するのではなく、男に対して心を開く女の姿が浮かび上がってくる。

これに関連して、大島本の六十九段末尾には、

○　私云えにしあればとは、えんといふ事也。あさくともすくせあらばといふを。

という勘物が付せられている。先に挙げた場面の直後に女が男に「かち人の渡れど濡れぬえにしあれば」と詠みかけたことに関連して勘づけられたものと思われるが、この短連歌の本の部分だけを見ると、「…浅い江ではないが、私とあなたはその程度の宿縁であるので」という意味にしか取れず、「あさくともすくせあらば」といったような理解は誤りであると言わねばならない。それでもこうした勘物が存在するのは、大島本では男と再び会えなかったことを女も悲しんでいることがより強調されているのに起因すると思われる。

六、まとめ

前節で述べたことをも考慮するならば、現存する広本系諸本の中では、大島本が最も古態を留めているものと思しく、まずはこの本の精緻な読解を試みるべきである。その上で、定家本と対置させ、それぞれの写本の特徴を相対的に掴んでいくことが必要なのではなかろうか。

一　谷知子・田渕句美子編『平安文学をいかに読み直すか』所収、笠間書院、二〇一二年。

二　『伊勢物語考――成立と歴史的背景』（新典社、二〇一四年）。

三　有精堂、一九六〇年。

四　木戸は「『伊勢物語』の異本A段に関する一考察」（三重大学日本語学文学」二号、一九九一年六月）で、「「ふりくらし」の歌は女の歌ととる方が自然」と述べており、片桐『全読解』は、「降り暮らし降り暮らしつる雨の音を」聞きながら待っているのは、どう考えても「女」とすべきではないか。」と指摘する。

五　『伊勢物語異本に関する研究』（桜楓社、一九八三年）。

六　なお、日大為相本の本本文は、「あめのいみじうふるに、ある人のがりやりし」と書き始められており、他本が有する「ふりくらしてつとめてもなをいみじうふ」を持っていない。「いみじうふ」の目移りによる脱文と断じてよい。

七　山田清市『伊勢物語校本と研究』（桜楓社、一九七七年）では、ここに挙げた勘物を七十五段のものとして扱っているが、内容から見て当然誤りである。

八　大島本の、「…もにす。昔の…」は、日大本のように「もにすむゝしの」とあった踊り字が「か」と誤られ、さらにそれが転写の際に漢字表記されたものであると考えられる。ここは大島本の親本の段階で生じた単純な誤写と見られる。

九　『泉州本伊勢物語』（国学院大学学術部、一九四一年）。

一〇　『泉州本伊勢物語の研究』（白帝社、一九六八年）。

一一　この他、七十五段の和歌の、以下のような本文異同も、泉州本の本文生成を考える上で参考となろう。

大　いはねよりおふるみるめしつねなくはしほひしほみちかひもありなん
相　いはまよりをふるみるめしつれなくはしほひしほみちかひもありなん
泉　いはまよりおふるみるめしつねならばしほひしほみちかひもありなん
阿　いはまよりおふるみるめしつれなくはしほひしほみちかひもありなん
天　いはまよりおふる見るめしつれなくはしほひしほみちかひもありなん

この歌はやや難解な歌であるが、元来「つれなくは」とあったものが、「れ（礼）」と「ね（祢）」との字形相似により大島本のような「つねなくは」の形に本文が転訛し、そこからさらに泉州本のごとき「つねならば」といった形となったのではなかろうか。

第三章　『伊勢物語』と物語

第一節　「二条后物語」の成長

一、緒言

『伊勢物語』は、その成立間もない頃から、在原業平の一代記的な恋の物語として享受されてきたと思われる。作中には様々な女性との恋愛が語られているが、特に清和天皇の後宮に入内する前の藤原高子(のちの二条后)との恋を描いた一連の章段は広く人々に知られていた。「二条后物語」とも呼ばれる二人の恋のエピソードは、『伊勢物語』のほか、『大和物語』などにも描かれている。

『大鏡』の陽成帝紀にも、『伊勢物語』の記述を引きながら、二人の関係について言及した箇所がある[1]。

次の帝、陽成天皇と申しき。これ、清和天皇の第一皇子なり。御母、皇太后宮高子と申しき。権中納言贈正一位太政大臣長良の御女なり。

…(中略)…御母后、清和の帝よりは九年の御姉なり。二十七と申しし年、陽成院をばうみたてまつりたまへるなり。元慶元年正月に后にたたせたまふ、中宮と申す。御年三十六。同じき六年正月七日、皇太后宮にあがりたまふ。御年四十一。

この后宮の、宮仕ひしそめたまひけむやうこそおぼつかなけれ。いまだ世ごもりておはしける時、在中将しのびて率てかくしたてまつりたりけるを、御せうとの君達、基経の大臣・国経の大納言などの、若くおはしけむほどのことなりけむかし、取り返しにおはしたりける折、「つまもこもれりわれもこもれり」とよみたまひたるは、この御ことなれば、末の世に、「神代のことも」とは申し出でたまひけるぞかし。

…(中略)…二条の后と申すは、この御ことなり。

「つまもこもれりわれもこもれり」とは、定家本『伊勢物語』十二段の和歌の下句である。現存『伊勢物語』において二条后とは直接関係の無いこの段が「二条后物語」として理解されていることから、後の享受者たちは場面設定の似ている章段を積極的に「二条后物語」に組み込んでいくといった読み方を行っていたことが知られる。

『伊勢物語』では、様々な形で男と二条后との恋が語られているが、『大和物語』中の、いわゆる在中将章段も同様に男と二条后との恋を描いており、その両者の影響関係が古来様々に論じられてきた。本稿では『伊勢物語』三段と『大和物語』百六十一段前半部との先後関係について、先行研究を踏まえつつ検討し、そこからさらに『伊勢物語』成立の問題についても言及したい。

二、『大和物語』における「思ひあらば」歌の詠者

本稿で問題とする『伊勢物語』三段と七十六段、およびそれらを合体させたかのような体裁をとる『大和物語』百六十一段の本文を掲出する[2]。

〈『伊勢物語』三段〉

むかし、おとこ、ありけり。けさうじける女のもとに、ひじきもといふものをやるとて、

　思ひあらばむぐらのやどにねもしなんひじきものにはそでをしつゝも

二條のきさきの、まだみかどにもつかうまつりたまはで、たゞ人にておはしましける時のこと也。

《『伊勢物語』七十六段》

むかし、二條の后の、まだ春宮のみやすん所と申ける時、氏神にまうで給けるに、この衛つかさにさぶらひけるおきな、人〳〵のろくたまはるついでに、御くるまよりたまはりて、よみてたてまつりける、

　大原やをしほの山もけふこそは神世のことも思いづらめ

とて、心にもかなしとや思ひけん、いかが思ひけん、しらずかし。

《『大和物語』百六十一段》

ざい中将、二条のきさいの宮、まだみかどにもつかうまつりたまはで、たゞ人におはしましけるよによばひたてまつりける時、ひじきといふものををこせてかくなむ、

　おもひあらばむぐらのやどにねもしなむひじき物にはそでをしつゝもとなむのたまへりける。かへしを人なむわすれにける。

さて、きさいの宮、春宮女御ときこえて大原野にまうでたまひけり。御ともにかむだちめ・殿上人いとおほくつかうまつりけり。ざい中将もつかうまつれり。おほむくるまのあたりに、なまくらきをりにたてりけり。御社にて[3]おほかたの人〳〵ろくたまはりてのちなりけり。御くるまのしりより、たてまつれるおほむひとへの御ぞをかづけさせたまへりけり。ざい中将、たまはるまゝに、

　おほはらやをしほのやまもけふこそはかみよのことをおもひいづらめ

と、しのびやかにいひけり。むかしをおぼしいでゝ、おかしとおぼしけり。

はじめに、『大和物語』百六十一段の本文解釈における問題を扱う。『大和物語』では、百六十段から百六十六段にかけて、在中将業平とその周辺の女性との間で交わされた和歌の贈答が描かれており、「在中将章段」と呼び慣わされている。就中、百六十一段は二条后との関わりを描いた章段群の中核であり、『伊勢物語』との関連が注目されてきた。二人の間で「ひじき」に寄せた和歌の贈答があった後、「春宮女御」と呼ばれるようになった二条后の大原野参詣に供奉した在中将が、禄を賜るついでに「ひじき」のエピソードを回想する歌を詠みかけた、というものである。

「思ひあらば」の歌については、『伊勢物語』三段においては男が詠んだ歌であることや、傍線を付した箇所の敬語が不統一であることなどから、従来これが二条后の詠なのか在中将の詠なのかの両説があり、未だに決着を見ていない。『伊勢物語』との影響関係について考えるためにも、まずこの点について検討する必要があろう。

結論から言えば、稿者は『大和物語』におけるこの歌は二条后から在中将へ詠みかけられたものと解する他無いと考えている。この歌の詠者が判然としないのには、先にも述べた通り敬語の不統一という理由があり、稿者と同様の立場を取る論考[4]の多くも、これについて明快に説明できていない。そこでまずは、在中将が詠者であるとする諸説のうち、敬語法に

ついて詳しく言及している柿本奨の説[5]について考えたい。

主語は業平である事は動かない。しかし業平を為手とする為手尊敬の言い方はしないので、「宣ふ」に(1)為手尊敬の場合と(2)受手尊敬の場合と二種の用法があると見てはどうであろう。この受手は后で、「姉なる人に宣ひみむ」(『源氏物語』帚木)も(2)で、稀例の用法である。「奉る」には同様二種の用法があり、それは受手尊敬として多用され、「宣ふ」は為手尊敬として多用された、と見る。

この論は、主語が業平であるという前提に立ち、歌の直後の「となむのたまへりける」が受手尊敬であるとすることによって説明を試みたものである。ここでは受手尊敬としての「のたまふ」の用例が認められるか否かが論点となろう。

まず、柿本が問題としている『源氏物語』「帚木」巻の本文を掲出しよう[6]。

…「かの、ありし中納言のこはえさせてんや。らうたげにみえしを、身ぢかくつかふ人にせむ。うへにも我たてまつらむ」との給へば、「いとかしこきおほせ事に侍なり。あねなる人にのたまひみん」と申もむねつぶれておぼせど、…

ここは『源氏物語』の解釈においても問題となっており、玉上琢弥が、異文を整理しつつ以下のように言及している[7]。

…紀伊の守は自分が言うことを「宣たまひみむ」と言っている。「宣たまひ」は為手敬語だから、自分に対して敬語を使ったことになる。しかも、聞き手は源氏なのだから、このようなことはありえない。河内本や別本に「のたまへはべらむ」とする本がある。「のる」という動詞に、卑下の助動詞、下二段活用の「たまふ」がついたのであろうか。しかし、他に見えない語である。別本のうち、陽明家本は「申しみん」とある。阿仏尼筆本は「のたまひてむ」〈おっしゃっていただきましょう〉。これらだと問題ないが、いずれも一本だけである。

玉上は本文異同を見据えた上でこの本文を不審としているが、『うつほ物語』においては、〈①下位の者が②身内に対して何か言い聞かせるという旨を、③上位の者に述べる〉という文脈で、「のたまふ」という語が頻出する。

〈①嫗が②自身の娘に対して頼んだということを③主である俊蔭の娘に対して言う〉

「…針にて見ゆる子は、いとかしこき孝の子なり。嫗の、丹波に侍る女の童生まむとて見たまへしやうは、いと使ひよき手作りの針の、耳いと明らかなるに、信濃のはつりをいとよきほどにすげて、嫗の衣に縫ひつく、と見たまへし。それだに、いかがはべる。ただそれにかかりてこそは、生きめぐらひはべれ。立ちぬる月にも、おもとの御ことのたまひ語らはむとて、まかりたりしかば、白き米三斗五升、大麦七斗くれてはべりしをこそは、とかくにしはべりしか。…」

（「俊蔭」巻）

〈①　大将仲忠が②二条院の者達に対して言い付けてみようということを
③父兼雅に対して言う〉

「…源中納言の御方に、あまた侍り。すべていくつばかりかは」。おとど、「いさや、十ばかりこそよからめ」。大将、「御前のことなど、かねて仰せられよかし。かしこにものたまはむ。御座所しつらはせたまふこと行はせたまへ」。…　（「蔵開中」巻）

そして、これらの例について、原田芳起は次のように述べている[8]。

…自分が自分の身内とか従者とかに何事かを言い付けることを、尊貴な身分の人を聞き手として言う時に「のたまふ」ということは、古い時代には決して違例の表現ではなかったことが知られる。…(中略)…すべて対話にのみ用いられている。『源氏物語』の対話の言語と、『宇津保物語』のそれとは、位相的にきわめて近い。…(中略)…青表紙本の「のたまひみむ」の方が、河内本の「のたまへみむ」よりも、『源氏物語』本来のものと見てよかろう。

これらの「のたまふ」の主語は話し手自身である。「のたまふ」ことの受け手は、話し手の身内か、隷属者である。この「のたまふ」から待遇表現を除けば、「言ひ付く」「言ひ聞かす」などであろう。ある旨趣を下位者に言語をもって伝達するのが「のたまふ」の本来の意味であるから、その意味では敬語以前であると考えられるが、どの例を見ても、話し手の聞き手に対する礼譲が重なっている。

ここまで見てきた用例に鑑みて、『源氏物語』「帚木」の例は、『うつほ物語』に頻出する、「自分が自分の身内とか従者とかに何事かを言い付けることを、尊貴な身分の人を聞き手として言う時」の語法（①紀伊の守が②空蝉に対して言ってみようということを③源氏に対して言う）であると言えるだろう。この例を含めて、「のたまふ」の謙譲語としての用法かとされてきた箇所は、全て原田のいう語法の範疇に収まるのであり、『大和物語』の当該例はそのような語法になっていない以上、通常の尊敬語としての「のたまふ」であると言わねばならないだろう。よって、柿本のように、問題の箇所を受手尊敬として解釈することはできない。そして当該本文の「のたまへりける」が通常の為手尊敬を表す用法であるとするならば、むしろ『大和物語』において敬語が一切用いられない在中将ではなく、二条后の動作であると考えなければならない。

また、「をこせて」に敬語が無いことから、これを在中将の動作だとする考えもあるが、これについては、「をこせて」と「のたまへりける」という二つの動作が連続したため、最初の敬語が落ちていると考えることができるだろう。同様の例は『大和物語』中に少ないながらも複数見られる。

三段

故源大納言、…(中略)…やなぎのしなひ、ものよりけにながきなん、このいゑにありけるをゝりて、

あをやぎのいとうちはへてのどかなるはる日しもこそおもひいでけれ

とてなむやりたまへりければ、いとになくめでゝ、のちまでなむかたりける。

百四十二段

故宮すんどころの御あね、…(中略)…むめのはなをゝりて、又、

かゝるかの秋もかはらずにほひせばはるこひしてふながめせましや

とよみたまへりけり。

三段は故大納言源清蔭の、百四十二段は故御息所の姉の動作であり、それぞれ他の部分では敬語が用いられているが、直後の敬語との重複を嫌ってか、歌を詠む直前の動作には敬語が用いられていない。これらの例から、貴顕の動作であっても、敬語の重複を避けるためにそれが適宜省略されるといったことは十分考え得ることであり、当該本文の「おこせて」も同様に考えるべきところであろう。

以上、『大和物語』および同時代の作品の敬語法を検討したところ、詠歌主体を在中将と考えることは出来ないといえる。すなわち『大和物語』百六十一段の「思ひあらば」歌は、『伊勢物語』の描写と異なり、二条后が在中将に詠みかけたものとして解さなければならない。

三、「伊勢」と「大和」の先後関係

次に、『伊勢物語』三段および七十六段と、前節で検討した『大和物語』百六十一段との書承関係について考えたい。一見して明らかなように、『大和物語』の当該章段は、『伊勢物語』の両章段を合体させたかのような体裁となっている。また、前節で言及した「思ひあらば」歌を含む『伊勢物語』三段の末尾にある、「二條のきさきの、まだみかどにもつかうまつりたまはで、たゞ人にておはしましける時のこと也」という本文については、『大和物語』本文中にもほぼ同じ形で見えることから、その書承関係について種々の論考がある。本稿でも、先行研究を適宜俎上にのせつつ、その生成過程について考察していきたい。

『伊勢物語』の古注釈を繙いてみると、『伊勢物語』三段の「二條のきさきの…」という本文について、夙に指摘のあることが分かる[10]。

> 物語の作者、其人を書あらはしたる詞也。　（『伊勢物語愚見抄』）
>
> 物語ノ作者ガ、前ヲ訓釈スル也。聊、業平ヲイタハリテ、タダウドニテ、オハシマス時ト云リ。又實ニハ、タゞ人ニテ、オハシマス時ナルベシ。　（『伊勢物語惟清抄』）
>
> 作者註なり。　（『勢語臆断』）

以上のように、中世のいわゆる「旧注」を代表する『伊勢物語愚見抄』をはじめ、近世「新注」の嚆矢である契沖の『勢語臆断』に至るまで、これを作者の自注であるとする説が行われていたことが確認できる。しかるに、賀茂真淵の『伊勢物語古意』において、

> こは後人の裏書也。…(中略)…本文はたとひ業平朝臣の哥を挙るも端書を異にし、又名を出せる人をば時世官位をさへいとことに書かへて必其人にあらぬさまに書たるを、かく定々と后の御名を出せる事、此文の旨に大にそむけり。

とされて以来、現在に至るまで後人の注記であるとする考えが主流となっている。また、この問題について、章段じたいの成立と関わらせて体系的に論じたのが片桐洋一であり、『伊勢物語の新研究』[11]において、「いずれにしても、現存「伊勢物語」の第三段が完全に出来上がってしまってから、その段末注を冒頭に本文化して「大和物語」第一六一段が作られていることは確かである。」と述べている。爾来、『伊勢物語』成立についての最新の論考の一つである妹尾好信の説などもこれに従っている[12]。現在の研究においては、『伊勢物語』三段が成立し、その後それに注記的本文が追加され、それらを基にして『大和物語』百六十一段が成立した、というのが一般的な理解になっていると思しい。

しかし、『伊勢物語』三段に、全く何も介さずに二条后物語として読めるような注が付されるとは考えにくいのではないか、というのが稿者の見解である。以下、そのことについて検討していく。

『伊勢物語』には、三段の他にも、登場人物の具体的な名前を明らかにする記述があり、それらは後人による注記的な本文ではないか、と疑われている箇所である。しかるに、それらはいずれも、物語本文か、あるいは現存する他の資料から、類推・比定し得るという特徴がある。例えば、六十九段には、以下のような注記的本文がある。

齊宮は水のおの御時、文徳天皇の御むすめ、これたかのみこのいもうと。

この記述は、男を業平と考えたとき、その当時の帝と斎宮を考えれば、自動的に導き出されるものであるし、同じ歌が『古今集』に見えることから、業平と時の斎宮恬子内親王の恋物語として読まれる可能性はじゅうぶんに内包しているものであったと言えるだろう。このように、主に系図の上から辿り得るものの他、百二段の本文などは、物語の内容から、登場人物が自ずから推定できるものであると考えられる。

むかし、おとこ、有けり。うたはよまざりけれど、世中を思しりたりけり。①あてなる女のあまになりて世中を思うんじて、京にもあらず、②はるかなる山ざとにすみけり。③もとしぞくなりければ、よみてやりける、

そむくとて雲にはのらぬ物なれど世のうきことぞよそになるてふ

となんいひやりける。斉宮の宮也。

この章段の末尾、「斉宮の宮也」とは、斎宮であった内親王で、恬子内親王を指すと考えてよいだろう。登場する「女」が「斉宮の宮」に比定されている根拠として考えられるのは、波線を付した三箇所である。まず①「あてなる女のあまになりて」については、百四段に「こととなることなくてあまになれる人」という類似した表現が見られるが、三巻本『枕草子』における「宮仕へ所は、…斎院。罪深かなれど、をかし。」などの記述に知られるように、斎宮・斎院といった神に奉仕する場所が仏事を忌むべき所であったため、「罪深」い所であり、その任を解かれた斎王が落飾するといったことを想起させる記述であると言えるだろう。

②の「はるかなる山さとにすみけり」という記述については、出家した兄惟喬親王とともに、内親王が小野に住んだことを伝えるものである可能性が指摘されている[13]。③の「もとしぞくなりければ」という記述も、業平の高貴な女性の親族ということで、女に恬子内親王を比定する支柱となっていると考えられそうである。他に六段の長大な注記的本文なども、仮にこれを後人によるものと考えたとき、既に二条后物語として人々によく知られていた四段・五段の直後に位置し、かつ「女のえうまじかりけるを、としをへてよばひわたりけるを」という叙述があることなどから「女」は二条后であると導くことはじゅうぶんに可能であろう。

人物名を明らかにする箇所には、物語成立の当初からあったと考えられる本文と、後人による注記であるらしいものとが混在していると考えられているが、最大限範囲を広めて調査しても、ほぼ内部もしくは外部に徴証のあるものばかりである。ところが三段には、「むかし、おとこ、ありけり。けさうじける女のもとに、ひじきもといふものをやるとて」という簡単な地の文のみしか見えず、いかに四段・五段に隣接しているといっても、これだけでは二条后に関連する注記は生まれ得ないと考えられるのである。

このように考えてきたとき、「二条后の…」という本文は何らかの典拠があったと考えるべきであり、ほぼ同一の記述を持つ『大和物語』百六十一段から取られたものと考えるのが最も適当であると言えよう。また、ここで取り上げた片桐の議論は、これらの章段のみに留まらず、『伊勢物語』全体の成立にかかわる問題を孕んだものであり、これについては、吉山裕樹の所説をも併せてとりあげつつ、次節で考察していきたい。

四、「大和」先行説とその問題

平安末期に始まる研究の蓄積によって、我々が今目にするような形の『伊勢物語』は、一回的に成立したものではなく、何人かの手によって段階的に成立したものであるらしいことが明らかになっている。その中でも片桐洋一の説は、『古今集』の資料となったかなり古い章段と、その後に成立した比較的古い章段、そして『在中将集』など業平私家集が編まれた時期に至っても存在していないかなり新しい章段と、おおまかに三段階ほどにその成立時期を区切って立論されたものである[14]。就中、当時の人々が業平の実作か否かを選定するような客観的な視点は持ち得なかったと断じ、業平私家集に採られていない歌を含んだ章段は全て、それが編まれた以降に成立したものだとする点が片桐説の大きな特徴であり、現行の成立論の中で、最も受け入れられているものであると言ってよい。

この、いわゆる段階的成立論に沿って考えると、『伊勢物語』三段の本文は『在中将集』をはじめとする業平私家集に見られないので、それ以降の、かなり新しい時代の成立であると言うことができ、注記的な本文は、そのさらに後に書かれたものということになる。しかし、その一方で、片桐は注記的本文を含んだ『伊勢物語』三段を『大和物語』の典拠として捉えており、この視点から考えると、『伊勢物語』三段は、『大和物語』を撰集資料としている『在中将集』よりも前の成立と考えなければならなくなる。ここに片桐の論の矛盾が存在していると言えるだろう。これを図示すると、以下のようになる。

①　『在中将集』→『伊勢物語』三段→三段注記的本文
②『伊勢物語』三段→三段注記的本文→『大和物語』→『在中将集』
※①は段階的成立論に従った場合　②は『大和物語』との関わりで片桐が述べた説に立脚した場合

このような矛盾を解決すべく、吉山裕樹は、「『大和物語』百六十一段→『在中将集』→注記的本文を含んだ『伊勢物語』三段」という過程を想定し、以下のように論究している[15]。

いわゆる伊勢物語三元的成立論では、…(中略)…伊勢物語３段は第三次成立の章段とされている。伊勢３段では「思ひあらば」の歌は明らかに男の歌となっているのであるから、在中将集編纂時に成立していたとすれば、当然採歌されるはずで、そうなっていないのは、やはり在中将集編纂時には伊勢３段は成立していなかったと考えるべきであろう。

しかし、…(中略)…大和物語161段は在中将集編纂時にはすでに成立していたと考えられる。とすれば、伊勢物語３段から大和物語161段前半部に取り入れられたとは考えられず、逆に大和から伊勢物語に取り入れられたと考えるべきであろう。

かような吉山の議論に従った場合、『在中将集』に歌が採られていない『伊勢物語』の章段は全て新しい時期の成立であるとする片桐の成立論に整合するが、このように考えてもなお、いくつかの問題点が見えてくる。まず一つ目が、『大和物語』をもとにして『伊勢物語』の本文が注記的な部分を含めて一回的に成立したとするならば(後掲引用参照)、『伊勢物語』において「二条后の…」以下の本文が末尾に現れるのは不自然であるということである。先に示した『伊勢物語』七十六段も、これが『古今和歌集』八七一に、

二条のきさきのまだ東宮のみやすんどころと申しける時におほはらのにまうでたまひける日よめる　　なりひらの朝臣
おほはらやをしほの山もけふこそは神世の事も思ひいづらめ

といった形で典拠を持つためにその詞書をほぼそのまま踏襲した本文となっており、もし三段の典拠として『大和物語』百六十一段が既に存在していたとすれば、同様に「二条后」という実名を地の文の中で現すのが自然であると言えるのである。

また、吉山は「伊勢３段では「思ひあらば」の歌は明らかに男の歌となっているのであるから、在中将集編纂時に成立していたとすれば、当然採歌されるはず」と述べているが、本稿第二節で述べたように『大和物語』において当該歌の詠者が二条后となっているらしいことと併せて考えた場合、この指摘にも疑問が生じてくる。

『在中将集』に収められている歌のうち、『大和物語』のみならず、『伊勢物語』や勅撰集にも重載されている歌については、その詞書の多くが『大和物語』に拠っており、『在中将集』編者がこの物語をかなり重要視していたことが窺知される。

例えば、『在中将集』六番歌の詞書を見ると[16]、

きさいの宮の菊めしけるに、ほりてたてまつるとて

うへしうへは秋なき時やさかざらむ花こそちらめねさへかれめや

となっている。この歌は『伊勢物語』や『古今集』にも収められたものであるが、いずれも詠作事情が「人のせんざいにきくうへける」(『伊勢物語』)時のものとして説明されており、ここで傍線を付した「きさいの宮の菊めしけるに」という内容に合致するのは『大和物語』百六十三段の、「きさいの宮よりきくめしければ」のみである。

二条后以外の女性との贈答に目を向けてみても、例えば、『在中将集』十一～十二番の、

そめどのゝ内侍の許にかよひけるころ、女

あきはぎをいろどる風のふきぬれば人の心もうたがはれけり

返し

秋はぎをいろどる風はふきぬともこゝろはかれじ草葉ならねば

という贈答において、『後撰集』では特に明示されていない贈歌の詠者を、『大和物語』と同様に染殿の内侍としていることも、勅撰集よりも『大和物語』の記述を優先している明証となる。

このように、『在中将集』においては、『大和物語』を、勅撰集や『伊勢物語』と同等か、あるいはそれ以上に重視しているといえるのである[17]。「思ひあらば」歌についても、現代の我々以上に敬語法に敏感であった当時の人々が『大和物語』では二条后による詠作であったと考えていたことは十分に想定できることであり、そうあってみれば、『伊勢物語』三段に男の詠作としてこの歌(および注記的本文)が既に存在していたとしても、『大和物語』において在中将の歌と贈答の関係になっていない当該歌を、『在中将集』では採らないということはきわめて自然なことなのである。

また、吉山は、『伊勢物語』三段の本文が『大和物語』の百六十一段に拠っているとの仮定に立脚しつつ、その生成過程について以下のように述べている。

大和物語では、二条后の歌とも在中将の歌とも解釈できるようになっていたものを、伊勢物語3段の作者は、在中将の歌と判断して「男」の歌とし、実名表記は章段末尾に回わす方針によって三段を形成したのであろう。

この指摘についても、既に検討した通り、当時の敬語法に忠実に解釈すれば、『大和物語』における「思ひあらば」歌の詠者は二条后であるとすべきであり、『伊勢物語』三段の作者がそれを誤ったと考えることはできないであろう。『伊勢物語』に先立って『大和物語』の当該章段が存在していたとはいえないのである。

以上のことから、吉山の言うような『大和物語』が『伊勢物語』に先行する、という可能性も低いと考えられる。とすれば、ここで問題にしている章段群の生成過程について、現行の諸説にとらわれず再考する必要があるだろう。

五、「伊勢」から「大和」へ、そして再び「伊勢」へ

ここまで、注記的本文を含んだ『伊勢物語』三段、および『大和物語』百六十一段の生成過程について、従来の説を批判しつつ考察してきた。稿者の考えでは、片桐説・吉山説いずれも当たらない、ということになる。そこで、『伊勢物語』三段の本文がまず成立し、それを『大和物語』が詠者を反転させるという創意を見せつつ取り込み、『大和物語』における「二条のきさいの…」という本文が『伊勢物語』三段に付加されたのではないか、という考えを提示したい。『伊勢物語』に存在しながらも、この歌が『在中将集』に採られなかったのは、『伊勢物語』と『大和物語』とで詠者が逆であり、『在中将集』編者が、他の歌と同様に『大和物語』の記述を優先させたからであるという推測が可能となるだろう。

『大和物語』の「在中将章段」には、『伊勢物語』四段や五段のような、二条后物語の中核をなす物語が一切採られておらず、既に二条后物語として人々に知られていた章段を避け、それら以外から二条后物語を拡大するといった方法が選ばれていると言えるが、『伊勢物語』三段を摂取したのも、既に二条后物語として享受されていた四段・五段に隣接するこの段の歌を、二条后の詠にふさわしいものとして取り込んだものと考えられる。

「思ひあらば」の歌が『伊勢物語』では男の歌となっているにも拘らず『大和物語』では二条后の歌となっているということについては、この歌が元来女の詠みぶりであるという指摘がある。これについては、吉山が、

念人（おもふひと）　将来跡知者（こむとしりせば）　八重六倉（やへむぐら）　覆庭尓（おほへるにはに）　珠布益乎（たましかましを）
玉敷有（たましける）　家毛何将為（いへもなにせむ）　八重六倉（やへむぐら）　覆小屋毛（おほへるをやも）　妹与居者（いもとをりてば）

（万葉・巻十一・二八三四～二八三五）

ひさしうとはざりける人の、思ひいでて、こよひまうでこんかどささであひまてと申して、までこざりければ　よみ人しらず
やへむぐらさしてし門を今更に何にくやしくあけてまちけん

（後撰集・巻十四・恋六・一〇五五）

などといった例を引き合いに出し、当該歌の「葎の宿」という語について、

「恋」の歌に用いられると、…(中略)…女が男を自分の家に待つと云うイメージが付随しており、女の発想によるものと言う事ができよう。

と述べ、『大和物語』当該章段についても、

「思ひあらば」の歌が『大和物語』では「二条の后」の詠んだものとも捉え得る事、また「葎の宿」が女の発想である事を考え合わせると、…(中略)…「玉の台」にふさわしい「二条の后」の口から「葎の宿」と云うことばがでてくる所に、「思ひあらば」の歌の眼目があるのであろう。

とする[18]ほか、片桐洋一も、

金殿玉楼を棄てて「葎の宿に寝ることを厭わぬ」という次の句(稿者注:二句目)の表現は、権

門の子女で后がねと目されていた人に対して業平が言うにふさわしくない。

と指摘している通りである[19]。『伊勢物語』三段では、ある若い男が自らの思いを表白した、ひたむきな心情を描き出していたものだったのだが、『大和物語』作者は、在中将から二条后への懸想ばかりを描く『伊勢物語』の記述では飽き足らず、この「思ひあらば」歌を右に述べたような発想から二条后の歌として取りこみ、二条后自身が、「駆け落ちも辞さないという覚悟のほどを表明し」[20]たものとして一章段を構成したのであろう。当該章段の後半部は『伊勢物語』では七十六段に相当するが、ここで、『伊勢物語』の伝えと異なり、「むかしをおぼしいでゝ、おかしとおぼしけり」と、二条后の感懐が述べられているのも、『伊勢物語』には書かれ得なかった二条后の思いを描き出すことに眼目があったからである。「かへしを人なむわすれにける」という言辞については、「思ひあらば」と「大原や」の歌を、あたかも二条后と在中将との贈答であるかのように仕立て、二つの小話をスムーズに繋げるための工夫であったと考えられよう。

また、『大和物語』における他の二条后関連章段、一六二～一六三段とも併せて考えたとき、これらの章段に共通する手法を見出すことができる。

〈『大和物語』百六十二段〉
又、ざい中将、内にさぶらふに、宮すん所の御かたより、わすれぐさをなむ「これはなにとかいふ」とてたまへりければ、中将、
わすれぐさおふるのべとはみるらめど
こはしのぶなりのちもたのまむ（後略）

〈『伊勢物語』百段〉
むかし、おとこ、後涼殿のはざまをわたりければ、あるやむごとなき人の御つぼねよりわすれぐさを、「しのぶぐさとやいふ」とて、いださせたまへりければ、たまはりて、
忘草おふるのべとは見るらめど
こはしのぶなりのちもたのまん

これは『伊勢物語』百段が二条后物語として『大和物語』百六十二段に採られているもので、「後涼殿」にある「あるやむごとなき人の御つぼね」という表現が二条后を想起させるものであり、「忘れ草」の和歌も、二人の関係を示唆するものであると言えるだろう。

〈『大和物語』百六十三段〉
ざい中将に、きさいの宮よりきくめしければ、たてまつりけるついでに、
うへしうへば秋なき時やさかざらむ
はなこそちらめねさへかれめや
とかいつけてたてまつりける。

〈『伊勢物語』五十一段〉
昔、おとこ、人のせんざいにきくうへけるに、
うへしうへば秋なき時やさかざらん
花こそちらめねさへかれめや

『伊勢物語』五十一段も、それだけでは二条后物語と読みにくいものであるが、他の段の和歌がそれぞれ「ひじき」「忘れ草」に寄せたものであったのと同様、「菊」という植物に寄せた歌である点、また「花こそちらめねさへかれめや」という下句に入内後もなお相手の女を思う、という寓意を読みとれるという指摘がなされていることから[21]、『大和物語』が積極的に二条后物語に組み込んでいった、と考えることは十分に可能であると言えよう。

これらのことから、『大和物語』では『伊勢物語』に存在する、「二条后物語」として読み得る章段に「二条后」の名を明記して取り込み、歌語りとしての興味を追求した、と考えることができる。『伊勢物語』三段もまた、四段・五段に隣接していることに想を得て、『大和物語』百六十一段で「二条后物語」に取りこまれ、以来、「思ひあらば」歌は、『伊勢物語』では業平の詠として、『大和物語』では二条后の詠として、二人の若い日の恋情を歌った、今日まで広く親しまれるものとなったのである。

以上のことから、稿者は「思ひあらば」歌を含んだ物語は、まず『伊勢物語』三段が成立し、それが『大和物語』百六十一段の前半部においては二条后詠として取り込まれ、その本文を元にして『伊勢物語』三段の注記的本文が付加された、と考えたい。

六、結語

本稿では、『伊勢物語』三段と『大和物語』百六十一段の先後関係につき、従来不審とされてきた敬語法の分析を端緒にして考察した。その上で、〈『伊勢物語』三段の本文が成立→『大和物語』百六十一段の成立→『伊勢物語』三段注記的本文の付加〉という生成過程を想定することが最も合理的であるという結論を得た。このような成立過程を考えた場合、『伊勢物語』の成立論として広く受け入れられてきた片桐洋一の段階的成立論も、見直される必要があると思うのである。片桐説では、『在中将集』などに見えない『伊勢物語』の章段は、全てかなり新しい時期の成立であると説明されているが、稿者の説をとれば、『伊勢物語』三段は、『在中将集』成立以前から存在していたにも拘らず、それに採られなかった章段である、と言うことができる。

ところで、『平仲物語』には、以下のような記述がある[22]。

又、このおとこ、いひみいはずみ、ものいひすさぶる人ありけり。さのみものはかなくてありわたる、おのづからとし月へにけり。おとこ、をとせねば、女のもとより、しもつきのついたちの日いひたる、としはいくとせにかなりぬる、といひたるに、あやしがりて、かぞへければ、みとせといふついたちの日にぞありける。

いにしへのことのたとひのあらたまのとしの三とせにけふこそはなれ

かへし、

ふりにけるとしのみとせをあらためてわがよのことゝみちとせをまて

男の贈歌における、「あらたまのとしのみとせ」は、『伊勢物語』二十四段の、

あらたまの年の三とせをまちわびてたゞこよひこそにゐまくらすれ

を意識したものと考えられ、また、「いにしへのことのたとひ」とされていることから、『平仲物語』の当該章段成立時、既に『伊勢物語』二十四段の和歌が広く人口に膾炙していた可能性が強い。いま、『平仲物語』の成立を九六〇(天徳四)年前後と見た場合[23]、『伊勢物語』二十四段はそれ以前には有名なものとなっていなければならないが、片桐成立論に立脚すると、この章段は『在中将集』をはじめとする業平私家集が編まれて後の成立となり、矛盾

が生じてしまう。

片桐説については、渡辺泰宏の論考[24]などで見直されつつあるとも言えるが、未だに一つ一つの章段ごとの細やかな検討が充分になされているとは言い難い。今後もなお、ミクロな視点からの検証を通して、帰納的に考えていくことが肝要であると言えよう。

---

1 『大鏡』及び後掲『うつほ物語』本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館)の校訂本文に拠る。

2 『大和物語』の本文は、伝為家本の影印に拠る。翻字にあたって、適宜私に句読を切り、清濁を分かち、鉤括弧を付すものとするが、それ以外は、特に断らない限り基本的に底本の表記を保存してある。

3 底本、「宮しろ」。諸本により校訂した。

4 後掲する片桐・妹尾両氏の研究(注11掲書および注12掲書)のほか、柳田忠則『大和物語の研究』(翰林書房、一九九四年)や、猪平直人『『大和物語』在中将章段考」(「文芸研究」百五十一号、二〇〇一年三月)など。

5 『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院、一九八一年)。

6 『源氏物語』本文は、『大島本 源氏物語』(角川書店、一九九六年)に拠る。翻字にあたっては、注2と同様の態度をとる。

7 『源氏物語評釈 一』(角川書店、一九六四年)。

8 「中古における「のたまふ」の意味—敬語の意味体系の問題に触れて—」(「樟蔭国文学」九号、一九七二年三月)。

9 底本「ひ」に同筆の傍記で「へり」。大意に影響は無いのでこれに従っておく。

10 『伊勢物語』古注釈の本文は、竹岡正夫『伊勢物語全評釈』(右文書院、一九八七年)所収の本文に拠る。

11 明治書院、一九八七年。

12 例えば、妹尾の一連の論考が体系的にまとめられている近時の著作『平安朝歌物語の研究[伊勢物語篇][平中物語篇][伊勢集巻頭歌物語篇]』(笠間書院、二〇〇七年)において、「『大和物語』の冒頭表現が『伊勢物語』を意識しつつ二人の実名を明記したものであることは疑いない。…(中略)…『大和物語』の成立時には「後人注」がすでに存していたことを意味する。『大和物語』の成立は十世紀後半の円融朝頃と考えられるから、それまでには「後人注」とされる部分も含めた『伊勢物語』がすでに出来上がっていたことになるのである。」と述べられている。

13 山中智恵子『斎宮志 伝承の斎王から伊勢物語の斎宮まで』(大和書房、一九八〇年)。妹尾注12著書もこれに従っている。

14 『伊勢物語の研究 研究篇』(明治書院、一九六八年二月)。近年の論考としても、「業平集に見る伊勢物語の形成 鳥瞰」(『伊勢物語 虚構の成立』所収、竹林舎、二〇〇八年)などがある。

15 「大和物語における在中将・二条后説話と伊勢物語」(「広島大学文学部紀要」三十九号、一九七九年十二月)。

16 『在中将集』の本文は、片桐洋一『伊勢物語の研究 研究篇』所収の翻刻本文に拠る。

17 ただし、後掲する『大和物語』百六十二段の「忘れ草」歌は、『在中将集』において、「あるみさうしより」忘れ草を差し出された時のものとされており、「宮すん所の御かたより」となっている『大和物語』の記述よりも、「あるやむごとなき人の御つぼねよ

り」という『伊勢物語』の記述に近い。しかし、渡辺泰宏によって『在中将集』の原態は小相公本『業平集』であるとされており(『伊勢物語成立論』風間書房、二〇〇〇年)、この小相公本の一部を留めている宮内庁書陵部蔵『業平集』およびその親本である冷泉家時雨亭文庫蔵素寂本『業平集』の増補部では、御息所の曹司から忘れ草が差し出されたことになっている。

また、『大和物語』百六十段「流るとも」歌について、『大和物語』では染殿の内侍に贈られた歌であるにも拘らず『在中将集』で「宮つかへしける人」に贈られた歌となっていることについても、渡辺はこれが小相公本『業平集』に基づき『在中将集』が成立する際に生じた誤りであることを断じている。小相公本の一部を留めている前記二本では内侍に贈られた歌とされていることからも、元は『大和物語』によってこの歌が採られていたと考えてよいだろう。

18 「葎の宿―『伊勢物語』三段の歌をめぐって―」(「国文学攷」八十七号、一九八〇年九月)。

19 注11掲書。

20 妹尾注12掲書。

21 飯田季治『評釋　業平全集』(如山堂、一九〇七年)には、

裏面の心は、花の咲くと云ふをば逢瀬の契に喩へ、花こそ散らめと云ひて逢瀬の契こそは絶ゆれと様に響かせ、根さへ枯れめやの根をば心の根本の事に通はし、枯れめやを離れめやに云ひ掛けたるにて、その大意は、一と度君と契をこめ置きし上からは、いかでか君をば思ひ絶ゆべき、心には只管に君に逢はむ事を願へども、彼の菊の花の秋なき年に遇ひて、咲かむとするに咲かれざるが如く、今は殿内の人目しげくして、逢ふに逢ひ難き境遇にあるを如何にせむ、然れども其逢瀬の契こそ絶え果もせめ、心の底まで契を絶つ事やはあるべき、あはれ真の心は長しへに君が身辺を離れじ、されば君も我が心をば疑はずして、また長しへに我をば思ひ給へかしと也。

とあり、吉山注15論文でも支持されている。

また、当該歌をかように解釈するための参考歌として、以下のようなものを挙げられよう。

あひしりて侍る女の、人にあだなたち侍りけるに、つかはしける
平まれよの朝臣
枝もなく人にをらるる女郎花ねをだにのこせうゑしわがため
(後撰集・巻十二・恋四・八四四)

22 本文の引用は、目加田さくを校注『平仲物語　冷泉為相卿筆』(武蔵野書院、一九五七年四月)の影印による。翻字にあたっては、注2と同様の態度をとる。

23 萩谷朴は、『平中全講』(一九五九年)において、天徳三年から康保二年の間と推定し、妹尾好信も注12掲書において、平時経が子の保遠へ書き与えた処世教科書であるという立場から、天徳四年から応和二年の間であると、より時期を絞りこみつつ萩谷説を追認している。『平仲物語』の成立時期は未だに確定しているものではないが、両氏の説に従っておく。

24 注17掲書。

第二節　紀有常歌の本文変成

一、はじめに

『伊勢物語』は、『源氏物語』『狭衣物語』をはじめ、後続の作品に多大な影響を与えた作品であり、後続の作品が『伊勢物語』をどのように受容しているか、といった指摘もこれまでに様々なされている。しかし、そうした『伊勢物語』受容の様相を扱った研究においても、やはり天福二年本や、それに依拠した校訂テキストに拠って論じたものが目立つ[一]。

定家本とは異なる本文の『伊勢物語』と、他作品との影響関係として、これまで特に注目されてきたのが、『伊勢物語』四十段と『堤中納言物語』所収の短編「はいずみ」との関わりである。この段は、大島本では、

むかし、わかきおとこ、けしからぬ人を思けり。さかしらするをやありて、「おもひもぞつく」とて、この女をほかへをいやらむとす。さこそいへ、まだをいやらず。ひとのこなれば、とゞむるいきをいなし。女もいやしければ、すまうちからなし。さるあひだに、思ひはいやまさりにまさる。にはかにをやこの女をついにをいうつ。をとこ、ちのなみだをながせども、さうるよしなし。さてゐていでぬ。おとこなく〳〵よめる、

いでゝいなばたれかわかれのかたからんありしにまさるけふはかなしも

とよみてたへいりにけり。「なをざりに思てしぞいひしか、いとかくしもあらじ」と思ふに、まことにたえいりたれば、まどひつらをふき、願をたてけり。けふのいりあひばかりにたえいりて、又の日のいぬのときばかりになん、からうしていきいでたりける。女、かへる人につけて、

いづくまでをくりはしつと人とはゞあかぬなごりのなみだがはまで

とありけるをきゝてこそ、おとこはたえいりける。むかしのわかき人は、さるすける物おもひをなむしける。

となっており、広本系諸本のほか、略本の本間美術館本など、多くの非定家本では傍線部の女の歌についての叙述を有するのに対し、定家本のほぼ全ての諸本が傍線部の女の歌に関する叙述を有していない。一方で、「はいずみ」では、女が「いづこにか送りはせしと人問はば心はゆかぬ涙川まで」という歌を詠む場面があり、定家本のような形態の『伊勢物語』本文をも含めて、その先後関係が問題とされている[二]。

しかるに、この箇所を除くと、非定家系の諸本を視野に入れた受容の研究はほとんど管見に入らない。本節では、『伊勢物語』の和歌が『源氏物語』の和歌の言辞に影響を与えたと従来指摘されている箇所に関して、『伊勢物語』の異本の本文を視野に入れることで、新見を一つ提示したいと思う。

二、十六段の本文と解釈

本節で問題とする、『伊勢物語』十六段の本文を、まずは学習院大学蔵本に拠り掲げる。

むかし、きのありつねといふ人有けり。三世のみかどにつかうまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり、時うつりければ、世のつねの人のごともあらず。人がらは心うつくしく、あてはかなることをこのみて、人にもにず。まづしくへても、猶、むかしよかりし時の心ながら、よのつねのこともしらず。としごろあひなれたるめ、やう〳〵とこはなれて、つゐにあまになりて、あねのさきだちてなりたるところへゆくを、おとこ、まことにむつましきことこそなかりけれ、「いまは」とゆくを、いとあはれと思けれど、まづしければするわざもなかりけり。おもひわびてねむごろにあひかたらひけるともだちのもとに、「かう〳〵、『いまは』とてまかるを、なにごとも、いさゝかなることもえせでつかはすこと」ゝかきて、おくに、

手をゝりてあひ見し事をかぞふればとおといひつゝよつはへにけり

かのともだち、これを見て、いとあはれと思ひて、よるの物までをくりてよめる、

年だにもとおとてよつはへにけるをいくたびきみをたのみきぬらん

かくいひやりたりければ、

これやこのあまのは衣むべしこそきみがみけしとたてまつりけれ

よろこびにたへで、又、

秋やくるつゆやまがふとおもふまであるは涙のふるにぞ有ける

ここで取り上げるのは、傍線を付した、有常が詠んだ「手を折りて」の歌である。この歌は二句目に本文異同が甚だしく問題となるが、はじめに下の句「十と言ひつつ四つは経にけり」の解釈を固めておきたい。この「十と言ひつつ四つ」に関して、「四十年」を指すのか「十四年」を指すのかで諸注の説が古来分かれている。近年は、

・「とを」（十）ということを四回繰り返す意であろう。　（渡辺『集成』）
・「つつ」と言うのだから、十の四倍の四十年と解すべきであろう。　（石田『注釈稿』）

など、「四十年」説が優勢であるが、片桐『全読解』は、

・「一緒になってもう十年経ったね」という感慨をお互いに繰り返して言っているうちに、「さらに四年が経った」と言っているのである。

とする。この歌は前提として、「手を折りて」と上の句にあり、両手の指で数えると十になることに眼目があろうと思う。それを四回も繰り返すような長い年月連れ添い、そうであるのに妻を送り出さなければならない、という感慨をお詠んだものと考えられる。すなわち「十といひつつ四つ」は「四十年」と解さなければなるまい。

下の句の解釈を確認したところで、上の句「あひ見し事を数ふれば」について考えてみたい。「あひ見る」の語義については、第一章第一節で「あひ見てしかな」という本文を扱った際に詳述したが、今一度、用例を参照すると、

○　（前略）…うらには、まことや、くれにもまいりこむと思ふ給へたつは、いとふには

ゆるにや、いでや〳〵、あやしきは、みなせがはにを、とて、またはしにかくぞ、
　くさわかみひたちのうらのいかゞさきいかであひみんたごのうらなみ
おほかはみづの、…（後略）　（源氏・常夏）

などのように、単に「お目にかかる」の意味で用いられることもままあるが、こと恋愛関係・夫婦関係となると、「契りを交わす」の意味となる。

○　あひ見てののちの心にくらぶれば昔は物もおもはざりけり
（拾遺集・恋二・七一〇・権中納言敦忠）

こうしたことを踏まえて、『伊勢物語』の諸注においても、「あひ見し事を数ふれば」が、

妻とともに過ごした年月を数えてみると　（鈴木『評解』）
夫婦として生活したことを数えてみると　（片桐『全読解』）

などと訳されている。しかるに、「あひ見る」は「契りを交わす」ことであり、「夫婦生活を続ける」「夫婦として過ごす」などといった意味とは若干異なるのではないか。実際、「あひ見る」に過去の助動詞「き」が下接した、当該例と同様のケースを見ると、

○　しなてるやにほの湖に漕ぐ舟のまほならねどもあひ見しものを　（源氏・早蕨）

というものが見られる。ここも、薫が大君ではなく中の君と一夜を過ごしたことについて「あひ見し」と言っている。先に挙げた敦忠の有名な歌にも「あひ見てののちの心にくらぶれば」すなわち、〈一度契りを交わした後、あなたに会えないでいる物思いに比べてみると…〉とあるように、夫婦生活を続けるのではなく、契りを交わすことに対して「あひ見る」という語が用いられることは明らかであろう。これにもとづいて『伊勢物語』の当該歌を解釈すると、〈指を折って妻と契りを交わしたことを数えると、四十回だったのだなあ〉となり、全く意味の不明な歌となってしまうのではないか。

ここで、この和歌の二句目の本文異同を見てみたい[三]。

・あひ見し事を
→ほぼ全ての【定家本】・通具本・藤房本・真名本・最福寺本以外の【古本】
・経にける年を
→専修大学蔵建仁二年定家本・泉州本以外の【広本】・伝民部卿局筆本・武者小路本
・あひ見し年を
→最福寺本・泉州本

定家本や古本などの本文に対して、古本以外の非定家本では、「経にける年を」という異文が目立つ。この本文だと、〈指を折って、（妻とともに）過ごした年数を数えてみると〉となり、下句とよく整合する。もちろん、意味の通じやすい本文の方が通じにくい本文よ

りも古態を留めているとは言い切れない部分もあるが、先に述べた通り、「あひ見し事を」では、一首として意味をなさない以上、「経にける年を」の本文が元であったと考えることはできないだろうか。

三、『源氏物語』の「指喰いの女」のエピソード

有常の詠んだ「手を折りて」の歌の二句目は元来「あひ見し事を」ではなく、「経にける年を」であったのではないかと述べた。「あひ見し事を」という本文の出所については、『源氏物語』「帚木」巻のいわゆる「雨夜の品定め」の場面に求めることができる。明融本で当該の本文を掲出したい[四]。

「(私ガ女ニ)にくげなる事どもをいひはげまし侍に、女もえおさめぬすぢにて、およびひとつをひきよせて、くひてはべりしを、おどろ〳〵しくかこちて、『かゝるきずさへつきぬれば、いよ〳〵まじらひをすべきにもあらず。はづかしめ給めるつかさ・くらゐ、いとゞしくなにゝつけてかは人めかむ。よをそむきぬべき身なめり』などいひをどして、「さらば、けふこそはかぎりなめれ」と、このおよびをかゞめてまかでぬ。

「てをゝりてあひみしことをかぞふればこれひとつやはきみがうきふしえうらみじ」などいひ侍れば、さすがにうちなきて、

うきふしを心ひとつにかぞへきてこやきみがてをわかるべきおり

などいひしろひ侍しかど、…

ここでは、左馬頭が、女と口論となった末、女に指を喰われたことを受けて、「手を折りて」という歌を詠んでいる。本節で問題にしている先ほどの紀有常の歌を換骨奪胎したものと考えてよいだろう[五]。なお、『源氏物語大成』『河内本源氏物語校異集成』『源氏物語別本集成』の三校本を見るに、『源氏物語』ではこの部分に異同はほとんど無い[六]。この歌では、二句目が「あひ見し事を」とあっても何ら問題無いだろう。「指を折って、逢瀬を重ねた事を数えてみると、あなたの嫌なところはこれ一つではありませんでした」という意味である。

『伊勢物語』の和歌と『源氏物語』の和歌との関係について、現代注においては、

・源氏物語の、「手を折りてあひ見しことを数ふればこれひとつやは君が憂きふし」(帚木)はこの歌によるか。　(森本『全釈』)
・『伊勢物語』からの引用と思われる…　(鈴木『評解』)

などと言うに留まるものが多く、『伊勢物語』と他作品との影響関係を網羅的に調査した伊藤颯夫『伊勢物語の享受に関する研究』[七]も、「定家本系による享受と思う」とするにとどまっている。一方で、夙に、藤井高尚『伊勢物語新釈』が、

・「経にける年」塗本にしたがふ。他本に「あひ見し事を」とあるは、帚木巻に「手を折りてあひみし事をかぞふればこれひとつやは君がうきふし」とある哥の上句と似たる

ゆゑに、うつす人のふとかの歌の上句をかける也。かれはあひ見しをり〳〵にうきふしのありける事をかぞふる意にて、さいへり。此哥を「あひ見し事」としては四十度あひ見しいなりて、返哥とあはず。

と述べている点は留目されよう。塗籠本（略本）の本文を重視して、『伊勢物語』の当該歌の二句目を「経にける年を」に校訂している。これに対して、石田『注釈稿』が、

・『源氏物語』帚木の「手を折りてあひ見しことを数ふればこれ一つやは君が憂きふし」は、…（中略）…この『伊勢物語』の歌の上句を借用したものであろう。『新釈』は、塗籠本の「経にける年」を是とし、「あひ見し事」の本文は、帚木の歌に引かれて改訂されたものであろうというが、逆に、『源氏物語』の歌のほうが借用したものとすれば、広本系などの本文が後の改訂ということになろう。『新釈』は「見る」を、単に、あい逢う意とし、帚木の歌は「あひ見しをり〳〵にうきふしのありける事をかぞふる意」で、そう言ったので、この『伊勢物語』の場合は、さすれば、「四十度あひ見しになりて返哥とあはず」と言うが、「見る」をそのように狭くとる要はない。

という反論を行っているが、「見る」をそのように狭くとる要はない」という点は従えない。接頭語「あひ」の付いた形の「あひ見る」の場合は、これまで見たように、恋愛や夫婦関係の文脈においては「契りを交わす」の意味で用いられるのが原則である以上、藤井『新釈』の説くように、ごく単純に示せば、

○「経にける年を」の本文を持つ『伊勢物語』当該歌が存在
←
○『源氏物語』「帚木」巻において、「あひ見し事を」と換骨奪胎される
←
○『源氏物語』の歌句に引かれ、『伊勢物語』当該箇所に「あひ見し事を」の異文が発生

という過程を想定することができるのではなかろうか。

四、『伊勢物語』と他作品

ここまでの考え方に拠れば、少なくとも当該部分に関して、『源氏物語』作者が見ていた『伊勢物語』は、学習院大学蔵本のような本文を有するものではなかったことになる。平安時代に流布していた『伊勢物語』がどのようなものであったかを明らかにするのは難しく、また様々な伝本が流布していたものとも考えられるが、ここでは今見たような、『伊勢物語』の異本本文（通行本的位置を占める学習院大学蔵本に無い本文）が他作品に引かれている例と、『伊勢物語』成立以後の他作品の本文が『伊勢物語』の本文に影響を及ぼしていると思われる例とを挙げておきたい。

①『伊勢物語』異本本文から他作品へ

『伊勢物語』の異本本文が他作品の本文に影響を与えた、という確例は少ないものの、いわゆる歴史物語には、業平の実際の行状を記したもの、と考えて『伊勢物語』を引いていると思しい箇所が複数存在する。

『栄花物語』正編の「玉のむらぎく」巻では、藤原道雅が前斎宮と密通する場面において、

○ かの在五中将の、「心の闇にまどひにき夢現とは世人定めよ」など詠みたりしも、かやうのことぞかし。

という一文が見られる[八]。『伊勢物語』六十九段および『古今集』に見られる歌を引いたものであるが、『栄花物語』は先に述べたように『伊勢物語』を引用した箇所が多く[九]、『古今集』はもちろんであるが、『伊勢物語』をも意識して書かれたものと考えられる。傍線を引いた箇所は、古来「こよひ」と「よひと」の対立異文が存在し、『伊勢物語』では、定家本は「こよひ」となっているのに対して、大島本・日大為相本・阿波国文庫本などのほか、古本に属する時頼本、肖伯本、あるいは真名本などは「よひと」に作る。一方、『古今集』においても、「こよひ」と「よひと」が対立している[一〇]。『伊勢物語』から引用するところの多い『栄花物語』において、「よひと」を引用している点、この物語の作者が見ていた『伊勢物語』の当該箇所が「よひと」であった可能性が強いと考えられよう[一一]。

『栄花物語』正編からやや時代は下るが、道長の往生の後を描いた続編においても、現存定家本のような本文とは異なる本文から『伊勢物語』を摂取していたと考えられそうな痕跡がある。

○ 女院には待ちつけきこえさせたまひて、いとどしき催しなり。「いかに多かる」とはまことにこそ。こなたかなためづらしげなく、唐土船も寄せつべかりける。

女宮二人の渡御を待つにつけ、女院の彰子が涙を催す、という場面で、「唐土船も寄せつべかりける」という表現が見られる。これは、『伊勢物語』二十六段の和歌を引いたものである。

○ むかし、おとこ、「五條わたりなりける女をえゝずなりにけること」ゝわびたりける人の返ごとに、

おもほえず袖にみなとのさはぐ哉もろこし舟のよりし許に

『伊勢物語』のこの章段は、五条辺りの女を手に入れられなかったよ、という嘆きを吐露してきた人への返事として男が歌を詠み送る、という内容である。男の歌の中に見られる「もろこし舟のよりし許に」が先にみた『栄花物語』の傍線部に引かれているものと考えられているが、日大為相本は、この和歌の結句を「よせつばかりに」と作り、『栄花物語』の形により近いものとなっている。『栄花物語』作者は、この部分の本文が日大為相本のよ

うになっている『伊勢物語』を見ていた可能性があるのではないかと思われる[二]。

②他作品（『源氏物語』）から『伊勢物語』へ

本節の想定では、『源氏物語』の「あひ見し事を」という本文が、再び『伊勢物語』に取り入れられた、ということになる。これと同様に『源氏物語』の本文が、『伊勢物語』の本文に影響を与えた、と思しい箇所について、片桐洋一に指摘がある。

『源氏物語』「総角」巻では、

○ざい五がものがたりをかきて、いもうとにきむをしへたる所の、『人の結ばん』といひたるをみて

という記述がある。『在五が物語』とは、『伊勢物語』を指すと考えられるが、現存『伊勢物語』の諸本のほとんどが、「妹に琴教へたる」に合致する記述を持っていない。しかるに、古本に属する最福寺本が「いとおかしききんをしらべけるをみて」という本文を有する他、同じく時頼本、伝後醍醐天皇宸翰本、伝為明筆本なども同様の本文を持っている。これについて、片桐洋一は、

…定家本成立の基盤になった別本類に含まれる最福寺本・伝後醍醐天皇宸翰本・時頼本・伝為明筆本などが、定家本系統にも非定家本系統にも見られないこれらの特異異文を本来的に持っていたとは考えにくく、おそらくは、…（中略）…「源氏物語」総角の巻の「…（中略）…」という叙述に適合するように改竄された本文ではなかったかと思うのである。

と述べ、諸本の本文の伝存状況からこれらが元来的な本文ではないことを指摘し、

…「源氏物語」総角の巻の記述は、ここに紹介されている「伊勢物語絵」にそのような場面が描かれていたことを述べているにとどまり、物語本文に「妹に琴教へたる」と記されている必要は必ずしもないのである。

と言及する[三]。片桐説に拠れば、『源氏物語』に「妹に琴教へたる」とあるにも拘らず、『伊勢物語』伝本のごく一部にしか対応する本文が無いという疑問も氷解する。この例は、『源氏物語』の記述に引かれて、『伊勢物語』の本文が生成することの一例と見てよいように思われる。

以上、『伊勢物語』の異本本文が、平安時代に相応に享受されていたことと、『源氏物語』の本文が『伊勢物語』の本文に影響する実例を確認することができた。本論文で想定した十六段の本文の変成過程も、十分に考えられるものと言えるだろう。

五、定家本『伊勢物語』の本文

先ほど見た本文異同のうち、「経にける年を」の本文を持つ諸本として挙げた専修大学蔵本は、かつて山田清市によって、定家建仁二年本として、武田本との校異が挙げられたものである。専修大学蔵本が定家建仁二年本の姿を留めているかについてはなお問題があるが[一四]、もしこれを定家本と認めることができるならば、定家は「経にける年を」という本文を知りつつ、かなり早い段階で「あひ見し事を」の本文を採用したこととなる。定家の書写態度の変遷、という問題については、次の例も参考になろう。

『伊勢物語』七十四段は、以下のような掌編である。

むかし、おとこ、女をいたうゝらみて、

いはねふみかさなる山にあらねどもあはぬ日おほくこひわたる哉（へだてねどイ）

『伊勢物語』の当該章段の歌を現代語訳すると、〈厳しい巨岩を踏み越えていく山ではないけれども、あなたに逢わない日が多くて恋しく思い続けることだなあ〉となろう。このままでは若干意味が取りにくく、冒頭に「私とあなたの間を隔てているのは」と補って解さなければならないが、異文注記された本文「(…に)へだてねど」であれば、〈厳しい巨岩を踏み越えていく山が二人を隔てている訳ではないけれども、あなたに逢わない日が多くて恋しく思い続けることよ〉となり、歌意が明瞭となる。

この歌は、『万葉集』の以下の歌にもとづいている。

石根踏(いはねふむ) 重成山(かさなるやまは) 雖不有(あらねども) 不相日数(あはぬひまねみ) 恋度鴨(こひわたるかも)　（巻十一、二四二二、寄物陳思）

※非仙覚本系統の廣瀬本では、「カサナルヤマニアラネドモ」と訓が付されている。

定家本で異本注記の見える和歌の三句目に関して、非定家本と定家本の本文をそれぞれ確認しておきたい。また、素性の明らかでない（初期の無年号定家本の可能性もある）古本についても独立させて整理する。

非定家本

- **いはねふみかさなるやまはへだてねど**
  ↓広本【大島本・阿波国文庫旧蔵本・泉州本】・真名本・伝民部卿局筆本・藤房本
- **いはねふみかさなるやまをへだてねど**
  ↓日大為相本
- **いはねふみかさなるやまはへだてねば**
  ↓通具本

定家本

- **いはねふみかさなるやまはへだてねど**
  ↓武田本ほぼ全て・根源本全て
- **いはねふみかさなるやまはへだてねば**
  ↓武田本のうち高野本

・**いはねふみかさなるやまにあらねども**
　↓天福本

古本
・**いはねふみかさなるやまはへだてねど**
　↓古本ほぼ全て
・**いはねふみかさなるやまをあらねども**
　↓伝飛鳥井雅親（栄雅）筆本

ここに一覧した通り、天福本以外のほぼ全ての伝本において、「へだてねど」の本文を持っていることが分かる。これについて、片桐『全読解』では、以下のように述べている。

> 歌の第二・三句が「かさなる山にあらねども」となっているが、これでは意味が通じない。阿波国文庫本・歴博本・伝民部卿局筆本の三本のみならず、同じ定家本でも、武田本系、根源奥書本系、そして別本のすべてや真名本などには、「かさなるやまはへだてねど」とあって、「累々たる山は隔てていないが」という意になってよく通ずる。しかし、『伊勢物語』に限らず、三代集においても、定家の不断の本文研究の結果がその時々の定家本に表れており、天福二年書写本の「かさなる山にあらねども」という本文をそれ以前の「かさなる山はへだてねど」に戻すべきではないと思う。おそらく定家は、天福二年の段階になって、今まで用いていた「かさなるやまはへだてねど」を『萬葉集』によって校訂したのであろうが、「かさなる山は」とすべきところを「かさなる山に」と誤ったのではなかったか。『萬葉集』と同じく「かさなる山はあらねども」と再校訂することも可能だが、やはり底本にこだわって、「二人の間にあるのは」という意を補って、「(二人の間にあるのは)、岩根を踏んで行くような重なる山でないけれども」と読解することにした。

助動詞の「に」と係助詞「は」については『万葉集』の訓の問題もあるのだが、片桐の言うように定家は天福本の段階で『万葉集』によって「あらねども」の本文を採用したことが分かる。また天福本を読む際の態度としても、「へだてねど」に戻さずに「あらねども」で読むことは賛同される。

定家は『伊勢物語』の書写を重ねつつその本文を吟味していたのはもちろんだが、このケースでは、定家が『万葉集』により新しい本文を作りだしたと言えるだろう。先ほどの「経にける年を」の例も、定家建仁二年本における本文と認め得るならば、定家は「経にける年を」という本文を知りながらも、『源氏物語』に「あひ見しことを」という言辞を有する歌があることを重視して、「あひ見しことを」という本文を採用した、ということになろう。

定家本には、建仁二年本や天福二年本のように、書写年代の明らかなものもある一方で、武田本や根源本などの大部分が無年号本であり、特に根源本については、その実態が明らかにされているとは到底言い難い。ここで挙げたケースは、非定家本の研究と切り結びつつ、定家本の生成過程についても考えてゆく必要があることを示唆していると言えよう。

五、おわりに

以上、『伊勢物語』十六段の「手を折りて」歌の二句目が、元来は学習院大学蔵本などのような「あひ見し事を」ではなく、「経にける年を」とあり、それが『源氏物語』に受容されるにあたり、二句目が「あひ見し事を」と改作され、その本文に引かれて、『伊勢物語』の当該歌の二句目も「あひ見し事を」とする伝本が生まれたのではないか、という仮説を提示した。また、この本文生成の考察を端緒に、定家本の生成についても考えてゆく必要があることを述べた。

本節では、今までほとんど読解が試みられなかった、学習院大学蔵本以外の伝本の擁する本文から、一首の和歌が受容され、本文が生成される様を考察した。『伊勢物語』に限らず、異本と呼ばれる伝本群の本文を精査することにより、例えば、或る作品において、従来「引歌未詳」などとされてきた箇所の典拠が明らかになる可能性などもあろう。そうしたことをきっかけにして、「定家本」や「三条西本」などとは異なって素性の明らかではない多くの伝本群がどのように享受されて来たのかを解明する手がかりが得られるのではないかと思う。向後の典拠・受容研究においては、通行本的な地位を占める一本だけではなく、多くの諸本を視野に入れて、丹念に調査することが肝要であろう。

一　本文の引用・受容の問題を校訂テキストのみによって論じることについては、片岡利博『異文の愉悦　狭衣物語本文研究』（笠間書院、二〇一三年）が痛烈に批判している。

二　福井貞助『伊勢物語生成論』（有精堂、一九六五年）などに言及がある。

三　なお、ここに挙げた校異のほかに、他出として、業平私家集の本文を参看すると、この歌を収載する諸本のうち、前田家本『在中将集』が「へにけるとしを」、雅平本業平集が、「へにけるとしを」の「へ」に傍記で「あひ」と記されている。

四　明融本「帚木」巻の本文は、『東海大学蔵桃園文庫影印叢書　源氏物語　明融本　一』（東海大学出版会、一九九〇年）に拠る。

五　島津久基『対訳源氏物語講話』（矢島書房、一九四六年）では、紀有常の人物像とこの場面の馬頭の発言との照応関係も指摘されている。

六　河内本系の写本の中に、「あひみしのちを」と作るものが見られる。

七　桜楓社、一九七五年。

八　『栄花物語』の本文は、『新編日本古典文学全集　栄花物語』（小学館、以下『新全集』）による。

九　例えば、「たまのうてな」巻において、「千夜を一夜にと思ひしに、鶏の鳴きしはいかがつらかりし」という表現が見られるが、これは『伊勢物語』三十二段の「秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りて鶏や鳴きなむ」に拠ったものである。

一〇　『古今集校本』に拠れば、『古今集』においては、「よひと」とするものが優勢で、これに対して、雅俗山荘本、基俊本、清輔本系統の家長本、前田家本、天理本、伏見宮本など「こよひ」に作る伝本も相当数存する。

一一　『新全集』では、この部分について、「『伊勢物語』六十九段にみえる逸話。…（中

略）…ただし、第五句は「今宵さだめよ」で、『栄花』は『古今集』恋三によったものか」と注するが、『伊勢物語』および『古今集』の複雑な本文異同を見ると、このような付注は的外れなものと評せざるを得ない。

二二 この他、福井貞助『伊勢物語生成論』（注二前掲）は、『今鏡』における前斎院娟子と源俊房との情事を記した箇所に、「「夢かうつつか」なる事どもいできて、心や合はせたりけむ、負ひ出だし奉りて、…」とあることに関して、「夢かうつつか」が『伊勢物語』六十九段の和歌を引いたものであること以外にも、傍線部について、『伊勢物語』六段の非定家本系諸本に見える「女、心を合はせて」を念頭に置いて書かれたものだと指摘する。福井は塗籠本をベースに論じているけれども、広本のうち、大島本、日大為相本、阿波国文庫本などにも見られる本文である。

二三 片桐洋一『伊勢物語の新研究』（明治書院、一九八七年）。片桐『全読解』でも同様の立場を取っている。

二四 林美朗「伊勢物語・定家建仁二年本書写本の本文再建の試み」（「国語国文研究」百十四号、二〇〇〇年一月）、および加藤洋介「建仁二年定家本伊勢物語の復原」（「中古文学」七十九号、二〇〇七年六月）。

結語

一、本論文のまとめ

本論文では、三つの観点から、『伊勢物語』の本文について検討した。各章で述べたことの結論としては、

①現在の通行本的地位を占めている定家天福二年本にはこれまで指摘されていなかった誤写・誤脱が含まれており、大島本などを中心に定家天福二年本文以外の本文研究を進める必要がある。

②広本の系統論に関して、従来の諸説はなお見直す必要があり、定家本と対置させ得る伝本として大島本の評価を見直す必要がある。

③『伊勢物語』の本文には、他の作品と互いに影響し合いながら生成したと考えられるものがあり、非定家本を含め、従来指摘されている影響関係を再検討すべきがある。

という三点が挙げられる。

本論では、学習院大学蔵本以外の伝本として、繰り返し大島本の本文の重要性を主張してきた。もちろん、大島本だけを読めばいい、というのではなく、他の『伊勢物語』諸本についても、その内容を丹念に読み解いていくことが必要であると言える。

二、『伊勢物語』本文研究の未来

『伊勢物語』の本文研究の出発点として、片桐洋一による以下の発言にまずは耳を傾けたい。

> 確かに定家本は、優れて文学的であり、他の追随を許さない卓越した本文を伝えてはいる。しかし、それは、定家によって、優れて文学的な本文、他の追随を許さない卓越した本文に磨きあげられた結果としての存在であることを忘れてはなるまい。（『源氏物語以前』、笠間書院、二〇〇一）

これまで、『伊勢物語』の諸本論を扱った研究や伝本研究が皆無であったわけではなく、池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究』以来、着実に成果が積み上げられていると言える。一方で、読解・注釈の作業となると、南波『全書』などの注釈書や一部の『伊勢物語』研究者による論文など、ごく一部を除いては定家天福二年本を底本としたものが圧倒的に多く、大島本をはじめとするその他多くの伝本が顧みられることはほとんど無かった。本論文で問題としたかったのは、従来の研究におけるこのような態度である。

一つ例を挙げる。河地修「『伊勢物語』第六十九段について」（『古代中世文学論考』九、新典社、二〇〇二年）は、六十九段における「斎宮と業平との関係を、斎宮と神との関係に重ねるかたちで、言わば重層的に示し得たもの」と主張しており、その根拠として、六十九段における、

> …おやのことなりければ、いとねむごろにいたはりけり。あしたにはかりにいだしたてゝやり、ゆふさりはかへりつゝそこにこさせけり。かくてねむごろにいたづきけり。

という本文で、上位者から下位者に対しての「いたはる」から、下位者の立場から上位者に対しての「いたづく」へと変化していることを挙げている。ところが、ここで、大島本や、阿波国文庫本などを見ると、定家本では「いたづき」となっていたところが、「いたはり」になっている。大島本などでは、「いたはる」という動詞しか出ていないこととなる。なお、前掲河地論文は、こうした本文異同の問題には一切触れていない。この本文の問題をクリアするのが、まず初めに踏まれるべき手続きではなかったかと思う。

古典研究の根底を支えるものが、注釈である。その時代の語義語法を踏まえ、適切な用例調査によって、一つ一つの語句の意味を決定していくという作業は、基礎的研究として何よりも重要なものである。しかるに、多くの注釈書が底本にしている学習院大学蔵本『伊勢物語』においてさえ未だ解釈の定まっていない箇所も多く、まして広本系伝本の本文はほとんど読解されていないと言ってよい。これからの『伊勢物語』研究においては、大島本をはじめとする、これまで底本とされてこなかった伝本をベースにした注釈書の作成が必要である。その上で、これまで蓄積されてきた定家本『伊勢物語』の研究と切り結びつつ、総体としての『伊勢物語』を捉える試みが求められよう。